慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	路上生活者の生活実践 : カメルーン・ヤウンデ市を事例として
Sub Title	
Author	玉井, 隆(Tamai, Takashi) 梅垣, 理郎(Umegaki, Michio)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2010-03
Jtitle	研究会優秀論文
JaLC DOI	
Abstract	急速に拡大するアフリカ都市において、住民が日常生活の中で抱える困難は多岐にわたる。それは健康被害や衣食住の確保の難しさ、犯罪など、いずれも日々の生活に重大な影響を及ぼす課題である。こうした困難に対して行政の施策が不十分である場合、住民側からの自助努力が重要な役割を果たす。中でも日常生活に見られる様々な互助行為は、日々の困難の克服とより良い生活を模索する住民同士による創意工夫として注日できる。本研究の日的は、流動的で多様な生活背景を持つ人々が集まる都市において、人々が困難とどのように対峙しているのか、そしてそれをどのような生活実践により乗り越えようとするのか、こうした問いに対し、住民主体の互助行為に着日しながら明らかにすることである。 事例として、カメルーンの首都ヤウンデ市における路上生活者について検討する。ヤウンデ市の路上生活者の多くは、5名から最大30名ほどが空き地や木の下、橋の下、スーパーマーケットの前などに集まり寝泊りをしながら生活を送る。その構成員は工スニシティや出身地、宗教などにおいて多様性を持つ。例えば全く異なる工スニックグループであるバミレケとハウサの人々が同じ寝床にいたり、キリスト教徒とイスラーム教徒が混ざる路上生活者のたまり場でアラビア語の挨拶が交わされたりする。そうした雑多な関係の中で、日常生活の様々な場面に彼らの互助行為が見られる。例えば共同での食事の準備、仲間同 士のペットボトル集め、警察や憲兵の見回りや賄賂要求に関する情報の共有である。一方で彼らは路上生活者同士の暴力や口論、盗難といった多くの問題に日々直面している。加えて路上生活者の多くはより良い仕事を求めて他の都市に移動したり、逮捕され刑務所に移ったり、出身農村に帰還したりと、路上生活の場での人々の出入りは激しい。 本研究は、こうした互助と争いが日常生活の様々な場面で見られる点に着日した。路上では継続的な関係や集団の利益を優先することよりも、強い自己主張の下で自分の利益を優先する「言いたいことを言いあう」関係がより重視され、それが路上生活の場の安定性をもたらす。争いは短期的な「他人」同士のゼロサムの関係だからこそより強く行われ、お互いの不信を理解し取り除く役割を果たしている。こうした相手への理解を促進する争いが、安定的な関係性を早く生む契機となる。一方で日常生活の様々な互助行為は、生活上の様々な困難を乗り越え、かつ争いばかりの無秩序な状況を避ける役割を果たす。多様 な人々が集う出入りの激しい路上生活の場において、互助はゆるやかな紐帯を基盤としてなされる。このような互助と争いの生活実践を通して、路上生活者の生活は「なんとかやつていける」ものとなる。
Notes	梅垣理郎研究会2009年度秋学期
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0633

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

SFC-SWP 2009-A-005

研究会優秀論文

路

上生活者の生活実践

―カメルーン・ヤウンデ市を事例として―

2009年度　秋学期
AUTUMN

玉井　隆　総合政策学部 4年

梅垣 理郎　研究会

慶應義塾大学湘南藤沢学会

Keio SFC Academic Society

研究会優秀論文推薦のことば

本論文を読むと「村落を研究するのでなく、村落で研究する」というクリフォード・ギャーツの有名な言葉を想起させられる。アフリカのカメルーンというサッカー以外ではほとんど知られることのない西アフリカの一国。その首都の路上生活者を様々な角度から描き、当事者たちの「知恵」を明らかにしてゆく本論文はカメルーン研究を超えて、人間を活かすことも抹殺することもあり得る開発途上地域の都市空間を簡明に浮き彫りにしている。筆者は学部 2 年の時以来幾度かカメルーンに足を運び調査を展開してきたが、「カメルーン病」に陥ることなく、同時に路上生活者への限りない同情に満ちた観察を積み上げてきた。本論文で特徴的である細部への注意はこうした同情（愛情といってよいのかもしれない）に裏打ちされており、統計などの「平均化」された多くの都市論を超える特異な研究となっている。

慶應義塾大学
総合政策学部教授
梅垣　理郎

卒業論文
2009年度(平成21年度)

路上生活者の生活実践
—カメルーン・ヤウンデ市を事例として—

慶應義塾大学総合政策学部
玉井隆

2009年度（平成21年度）卒業論文

路上生活者の生活実践
—カメルーン・ヤウンデ市を事例として—

要旨

急速に拡大するアフリカ都市において、住民が日常生活の中で抱える困難は多岐にわたる。それは健康被害や衣食住の確保の難しさ、犯罪など、いずれも日々の生活に重大な影響を及ぼす課題である。こうした困難に対して行政の施策が不十分である場合、住民側からの自助努力が重要な役割を果たす。中でも日常生活に見られる様々な互助行為は、日々の困難の克服とより良い生活を模索する住民同士による創意工夫として注目できる。本研究の目的は、流動的で多様な生活背景を持つ人々が集まる都市において、人々が困難とどのように対峙しているのか、そしてそれをどのような生活実践により乗り越えようとするのか、こうした問いに対し、住民主体の互助行為に着目しながら明らかにすることである。

事例として、カメルーンの首都ヤウンデ市における路上生活者について検討する。ヤウンデ市の路上生活者の多くは、5名から最大30名ほどが空き地や木の下、橋の下、スーパーマーケットの前などに集まり寝泊りをしながら生活を送る。その構成員はエスニシティや出身地、宗教などにおいて多様性を持つ。例えば全く異なるエスニックグループであるバミレケとハウサの人々が同じ寝床にいたり、キリスト教徒とイスラーム教徒が混ざる路上生活者のたまり場でアラビア語の挨拶が交わされたりする。そうした雑多な関係の中で、日常生活の様々な場面に彼らの互助行為が見られる。例えば共同での食事の準備、仲間同士のペットボトル集め、警察や憲兵の見回りや賄賂要求に関する情報の共有である。一方で彼らは路上生活者同士の暴力や口論、盗難といった多くの問題に日々直面している。加えて路上生活者の多くはより良い仕事を求めて他の都市に移動したり、逮捕され刑務所に移ったり、出身農村に帰還したりと、路上生活の場での人々の出入りは激しい。

本研究は、こうした互助と争いが日常生活の様々な場面で見られる点に着目した。路上では継続的な関係や集団の利益を優先することよりも、強い自己主張の下で自分の利益を優先する「言いたいことを言いあう」関係がより重視され、それが路上生活の場の安定性をもたらす。争いは短期的な「他人」同士のゼロサムの関係だからこそより強く行われ、お互いの不信を理解し取り除く役割を果たしている。こうした相手への理解を促進する争いが、安定的な関係性を早く生む契機となる。一方で日常生活の様々な互助行為は、生活上の様々な困難を乗り越え、かつ争いばかりの無秩序な状況を避ける役割を果たす。多様な人々が集う出入りの激しい路上生活の場において、互助はゆるやかな紐帯を基盤としてなされる。このような互助と争いの生活実践を通して、路上生活者の生活は「なんとかやっていける」ものとなる。

＜キーワード　都市　路上生活者　互助　カメルーン・ヤウンデ市＞

慶應義塾大学総合政策学部　玉井隆
s06605tt@sfc.keio.ac.jp

目次

第1章 アフリカ都市と互助 5
1.1 アフリカ都市と日常生活の困難 5
1.1.1 都市の形成過程 5
1.1.2 都市の拡大と生活の困難 7
1.1.3 都市における互助／争い 9
1.2 研究の目的と調査の対象／方法 11
1.2.1 調査地と調査対象の選定 11
1.2.2 調査方法 12
1.3 本論文の構成 13
第2章 カメルーン・ヤウンデ市の路上生活者 14
2.1 カメルーン・ヤウンデ市概観 14
2.1.1 カメルーンの形成過程 14
2.1.2 ヤウンデ市の拡大 15
2.1.3 ヤウンデ市における小規模自営業と物乞い 16
2.2 路上生活に至るまでの背景 18
2.2.1 路上生活者の分布、出自 18
2.2.2 路上生活という選択 23
第3章 路上生活者の日常生活と互助／争い 25
3.1 路上生活者の日常生活 25
3.1.1 お金を得る 25
3.1.2 衣／食／住 28
3.1.3 ドラッグ／健康 30
3.1.4 警察・憲兵との対峙 32
3.2 路上生活者同士の争い 34
3.2.1 不平等な配分、盗難、暴力 34
3.2.2 Aへの不満 36
第4章 互助の中の争い 41
4.1 流動的な都市 41
4.1.1 刻々と変わる路上生活者同士の関係性 41
4.1.2 来るものは拒まず、去るものは追わず 42
4.2 互助と争いが交錯する生活実践 44
4.2.1 言いたいことを言う 44
4.2.2 変わらない日常生活 47
第5章 結論 48

5.1　結論 48
5.2　今後の展望 49
参考文献 51

【本論文における注意事項】

１．言語表記について
括弧内アルファベットで記載されたものはフランス語である。英語を表記する場合は[英]と記載してある。
例)　ストリートチルドレン([英]children on the street)

２．登場する人物や路上生活者に関する情報に関して
路上生活者の情報について、本人たちの安全を考慮し、暮らす場所や写真、生活の方法に関して一部の情報を減らしたり曖昧にしたりしている点がある。内容自体に齟齬をきたさないように考慮してある。
また登場する人物はイニシャル表記し、敬称は省略してある。

第1章 アフリカ都市と互助

はじめに

本章では本研究の背景、目的、研究の意義と方法、調査の対象について述べる。まずアフリカでの住民主体の互助がどのように、なぜ行われているかを明らかにするため、アフリカ都市の拡大を歴史的に概観した上で、そこで人々が抱える困難と互助行為の意味を検討する(1.1)。こうした背景をもとに、本研究はどのような視点の下でなされているのか、調査対象の選定と調査方法を合わせて記述する(1.2)。

1.1　アフリカ都市と日常生活の困難

1.1.1　都市の形成過程

「本来のアフリカは、歴史的にさかのぼるかぎりでは、ほかの世界との交渉をもたない閉鎖地帯」とヘーゲルは述べた（ヘーゲル 1994:157-8)。しかしアフリカには他の地域と同様、古来より活発な交流の歴史がある。そうしたアフリカの歴史への視座を広げていく動きは近年多く見られる。2008 年の日本アフリカ学会のシンポジウムⅠ「アフリカ独立 50 年を考える」の中で、「アフリカ史」の構築はアフリカ発ではなく、西欧諸国により語られるものを中心になされてきたという指摘があった。アフリカは少なくとも植民地支配が始まる以前までは、「歴史なきアフリカ」であったとする前提の見直しである。こうした点を踏まえ、例えば宮本・松田は(1)口頭伝承や遺物などの非文字史料の重視、(2)歴史学以外の学問分野への着目、(3)国家や階層性を持たない社会への着目を重視しながら、アフリカ史を記述することを試みている(宮本・松田 1997:10-20)。

以下、第 1 項、第 2 項を通してアフリカ都市の形成過程を概観し、現在都市において困難を抱える人々が現れるに至るまでの都市の拡大を検討する。

サウゾールは、アフリカ都市について、交易による発展や部族社会(王国)の形成、イスラーム化や奴隷交易などにより、ヨーロッパによる支配が始まる以前から栄えた都市(A 型)と、植民地支配をきっかけに急速に建設された都市(B 型)の分類を行った(Southall 1961)。この分類はアフリカ都市の理解を単純化し過ぎる側面があり、ケニアの首都ナイロビ市のようにA型とB型両方の歴史的経緯を持つ都市があるほか、多くの都市においても現在ではその分類が有効性を失っている。しかしここで重要なのは、ヨーロッパの支配が

始まるよりも遥か前から都市間で活発な人々の移動があった点、及びヨーロッパが都市の発展に与えたインパクトを注視する必要がある点である。

前者の事例として、現在の西アフリカのマリ共和国北部にある、人口 3 万人弱のイスラーム交易都市であるトンブクトゥがある[1]。トンブクトゥは、非西欧世界の中で近代以前にも発展していた都市のひとつとして知られている。赤坂によれば、トンブクトゥは 1375 年にアブラハム・クレスケスによりカタロニア図という世界地図の中で、黄金を豊富に産する都市として西洋で描かれていた。さらに地中海世界とニジェール川流域、南方のサバンナとの交易を結び付けるなど、様々な民族や地域の人々が行き交う交易都市として栄え、ヨーロッパ人から「黄金の都」と呼ばれていた。しかし 18 世紀から 19 世紀にかけて多くの探検家がそこを訪れたとき、トンブクトゥには彼らにとっての「黄金に輝く都」などなく、日干し煉瓦の建物が並んでいる小さな都市に過ぎなかった。その頃からトンブクトゥは最果ての地、「辺境」としてのイメージに成り代わったのである。西洋により「辺境」とされたトンブクトゥだが、一方で赤坂は、1940 年代に調査をした H・マイナーの成果を参照しながら、混交した文化と社会の中で、組織の解体、世俗化、個人化が進むなど、トンブクトゥにおいて「都市の原型」を見出すことができると指摘する（赤坂 2004:64-75）。それはまさに「多様な混沌の中で異質な民族や文化が見事に共存していたトンブクトゥこそ、本来的なあるいは原初的な「都市のあり方」を最大限に提示して見せた都市」であった(ibid.:75)。都市が西洋と接触するはるか以前からあり、都市において人々の出入りが激しく、出身地域、民族、文化の多様性が見られる点は、現代における多くの都市の特徴と類似している。

次に後者、すなわちヨーロッパ諸国による植民地支配が都市の発展に与えたインパクトについて検討する。植民地支配以前のヨーロッパとの接触については、15 世紀、いわゆる「大航海時代」における奴隷貿易の歴史がある。その中心はポルトガルであった。1415 年に現在のモロッコの北、スペインの飛地領であるセウタを占領したのを皮切りに、西アフリカを南下、1486 年の喜望峰「発見」を経て 1498 年、ケニアの港町マリンディに到着、その後インドへと渡った。16 世紀にはポルトガルとアフリカの王たちとの有効な関係が築かれ、大使の往来、贈り物の交換がなされていた。その後、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランスが南北アメリカでのヨーロッパ市場向け巨大農園経営を始めたことにより、大量の労働力が必要となり、その確保のための奴隷貿易が始まった。いわゆる「三角貿易」といわれる商業航海サイクルである。ヨーロッパから綿布、金属製品、アルコール飲料、鉄砲がアフリカに送られ、そこで奴隷と交換され、その後奴隷は西インド諸島、南北アメリカに運ばれ、そこで砂糖、綿花、タバコなどの主要換金商品を積み、西ヨーロッパに戻る仕組みである。そして 1884 年のベルリン会議においてヨーロッパ列強諸

[1] ヨーロッパとの接触以前の都市の発展に関する資料が限定的になってしまう問題は常に付きまとう。そうした問題を乗り越えるための様々な方策の展開が歴史学を中心になされている。そうした中でこれから述べるトンブクトゥの事例は、既存の資料を利用した様々な分析がなされている点、またそこで指摘されている都市の特徴が、現代における都市の特徴に極めて類似している点において興味深い。

国におけるアフリカの分割が行われた。植民地支配により建設された都市の多くはこの頃から始まる。この時のヨーロッパ諸国の支配の仕方はいくつかあり、例えばイギリスは間接統治方式モデルを採用した。それは当該地域の支配構造をそのまま利用し住民を支配するもので、イギリスはその支配者を認め、その構造を監督する立場にある。一方で優等人種が劣等人種を文明化しなければならないという「義務」に基づく、直接統治方式モデルを採用したのがフランスであった。またベルギーはボナパルトⅡ世の「私有地」としてコンゴ自由国を建設し支配した。また19世紀には奴隷貿易は禁止されていたものの、依然としてヨーロッパとの貿易は行われ続けていた。そのためカメルーン・ドゥアラ市のように、貿易のための拠点としての都市もあれば、ケニア・ナイロビ市におけるインド人のように、「非アフリカ人」が建設する都市も多くあった。こうしたアフリカ以外の国々の強い干渉による都市の建設と支配は、アフリカ諸国が独立を果たす1960年前後まで継続されることとなる(宮本・松田 1997)。

このようにアフリカ都市は植民地時代を経ており、都市の形成において宗主国の影響は大きい。とりわけ国境線は、先にあったエスニシティなどにより元々人々が理解していた境界線とは異なったものが引かれた。加えて都市の建設は今までの都市の建設と大きく性格が異なるものであったり、最初から西欧諸国の要請により行われたりした。こうした都市における植民地支配に対して、人々がどのように反応したかについて、日野は東アフリカを事例としながらそれを三つに分類し説明している。一つがイスラーム的適応型である。ヨーロッパによるキリスト教の布教以前から、イスラームの人々は国家の枠組みを超える商業ネットワークを持っていた。植民地支配初期のヨーロッパにとって、こうした力を持つイスラーム商人を無視できず、結果としてイスラームの人々は各都市の中間層を形成することとなった。二つ目が西欧化的エリート型で、ヨーロッパによるミッション教育に応じ、植民地の近代的セクターの中で活躍するようになる。こうした人々は独立後も新国家の官僚としての役割を担うこととなる。三つ目が後発的出稼ぎ型と呼ばれる人々である。例えば元々は自給自足の生活を都市の外で行っていたが、植民地下の外圧や、税金のための金銭の必要性に抗し切れず、遅れて都市にやってくることになった人々である。彼らは家僕、ポーター、畑の賃耕、左官や屋根葺き、鍛冶屋などに従事することとなった(日野 1992:230-46)。

以上のように、現在の都市におけるエリート層や中間層、出稼ぎ民といった人々の位置づけは歴史的に見た場合、植民地支配の頃からの影響があることが分かる。特に最後に述べたような、出稼ぎのために都市に移動する人々が、この後の各国の独立と開発政策の推進により急速に増加する。

1.1.2 都市の拡大と生活の困難

アフリカ諸国の多くが独立するのは1960年前後である。この頃のアフリカは独立を果た

し解放感に満ち溢れていたと言われるが、1970年代以降、人々の気持ちとは裏腹に経済状況は悪化の一途をたどっていた。とりわけ累積債務額が深刻化し、1981年の『バーグ報告書』に始まる構造調整計画が取られることとなる。国際連合や世界銀行、国際通貨基金(International Monetary Funds, IMF)はアフリカ諸国の「政策の失敗」を経済停滞の原因とし、新自由主義的な道筋への方針転換を促した。構造調整計画は一部が評価される他は、各国の財政状況を悪化させるにとどまったと言われる。

この頃から始まる都市人口の増加は著しい。1950年の時点でアフリカの都市人口の割合は14.5パーセントだったのに対して、2005年は37.9パーセントにまで上昇している(United Nations2007)。加えてグローバル化の進行に伴い、今や欧米諸国のみならずインドや中国からも多くの人々や企業が進出し、アフリカは大きな市場の一つとして世界各国に注目されている。

都市における人口の拡大はトダロ・ハリスの期待所得モデルにより説明されていた。つまりより高い所得が必要とされ、かつ農村より都市の実質賃金が高い場合、人々が都市へ移動するというものである。しかしこうした説明への反証は多くある。峯は期待所得モデルの非現実性を、労働市場の階層性の観点から説明した。それによると、たとえ都市での平均所得が高くても、都市における労働市場の階層性が強まっており、農村からの新参者がフォーマルな企業や行政で働くことはほとんど不可能である(峯1999:94-108)。

多くの人とモノが集まり行き交う都市での生活には、仕事がないこと以外にも様々な困難が伴う。困難とは現在直面している、あるいはこれから直面すると考えられる、人々にとって生活が脅かされていると感じる状態や物事のことである。食べ物がない、住居がなく夜安心して寝る場所がない、治るはずの病気にかかっても治す術がない、犯罪に巻き込まれやすい環境下にいることが困難の具体例である。松田は都市における日常生活上のこうした困難を、住民と行政の関係性から論じている。それによれば行政と住民との関係性は、(1)「援助」の欠落、(2)「阻害」の膨張、(3)「無関心」の肥大化の三点で説明される。「援助」の欠落とは、道路整備、住宅整備、上下水道、電気、ごみ処理などの日常生活に密着したサービスが欠落していることである。「阻害」の膨張とは、非正規居住者の弾圧を強化することである。例えば行政が各戸を訪ね、領収書がないラジオや時計、カセットレコーダーを押収する。このように行政は都市貧困層の生活環境の整備ではなく、むしろ都市生活からの迫害・弾圧を行う。また「無関心」の肥大化とは、都市貧民の生活上の困窮が激しさを増す一方で、行政が何も援助をしない無関心な状態にあることを意味する(松田1999:51-63)。

以上見てきたように、都市において人々が困難を抱えたのは、アフリカ各地における独立後、開発政策がうまくいかなかったことのみならず、都市におけるエリート層や中間層といった社会的地位や職種、所得などによる階層が、植民地時代からある程度固まりつつあったことと関連する。確かにかつては都市に仕事がある程度あったために、所得が低い

ことや生活上の困難を抱えていることが大きな社会問題とならなかった。しかし独立以後に見られる都市の急速な拡大の中で、労働市場の階層性は固定化し、労働市場は下層のみが膨張した。その結果、松田が指摘するような都市出稼ぎ民の困難な生活実態が浮かび上がることとなった。

以上のような通時的な都市の検討を通して都市の現状の背景を分析し、植民地支配以前に遡る歴史の中で生まれてきた点を見逃してはならない点を指摘した。

1.1.3　都市における互助／争い

上述した都市において人々が抱える困難を理解する上で、所得が高ければ回避できる困難も少なくはないが、本稿では、困難に直面した時にそれに対処する能力、あるいはより本人にとって価値があると考える生活を営むための財やサービスを利用する能力に着目する。A・センは貧困を検討する上で、「人それぞれが持っている「基本財」だけでなく、その「基本財」を自分の目標を促進する能力に転換する過程を左右し得る個人の特性も計算に入れなくてはならない」（強調は著者）と指摘した（セン 2000）。そのため個別の生活の文脈に焦点を当てながら、基本財やサービスの有無だけではなく、こうした能力の強化を評価してみていくことが必要とされる（渡辺 2000）。即ち、もし所得が低くても、個人の生活状況や社会的背景、個人の持つ人脈や出自、性格がいかにあるか、そしてそれを生かすことのできる環境にあるかの検討が重要となる。こうしたありとあらゆる個人の生活の文脈が検討の対象となるため、本研究は人々の困難とそれに対峙する人々の日常生活に着目する。

日常生活の着目にあたり、住民が困難な都市生活に直面しているにも拘わらず、行政による生活の支援や何らかの政策がなされない場合、注目されるのが住民主体による互助行為である。こうした互助行為は地縁や血縁を基盤としているが、日野によればエスニシティへの意識の強さは国民意識以前から強く人々の中にあり、そのため都市において様々な言語や習慣、考え方が周囲で見られる中でも、そうしたエスニシティの意識が強固に働くと指摘する（日野 1992:246-251）。なぜなら歴史的に見た場合、国民意識は独立後、公用語の教育や国旗掲揚、国家斉唱、大統領のテレビ演説に至るまでによって急速に拡大されている。一方でエスニシティはより人々に馴染み深く、友人関係や結婚などにおいて意識されている。

多くのエスニックグループが集まり、困難を背負う人々が多い都市の中で、人々は国民意識とは異なるエスニシティを利用し、互助を行う。互助行為とは例えば、インフォーマルな部門での職探しや都市での畑作り、親類や同村出身者ネットワークの活用を通して見られる都市生活の能動的な創意工夫により、困難を克服する動きである。それは、必ずしも収入形式によらず、また血縁を基盤としながら生活の様々な場面で行われていることが明らかとなっている。例えば西はエチオピアのアジスアベバにおいて、「1 人で死なないた

め」の葬儀講がもたらす様々な互助行為を調査した。この葬儀講は本来の目的である葬儀での資金援助のみならず、病気や怪我などでお金が必要になった場合や、道路や学校の建設のための資金援助も行う役割を持つ(西 2009:189-202)。また野元はカメルーン・ヤウンデ市を事例として、都市において同じ村同士の人々による庶民金融や保険制度を作り資金を管理するとともに、村自体との繋がりを重視し、少しでも余裕ができると積極的な村への仕送りを行う事例を示した（野元 2005:180-96)。

一方、松田はこうした親族関係や及び同郷者関係が、都市において創りだされている事例を報告している。そこでは都市において共同生活が不可欠となった状況の下で、全くの異人を「伝統的な身内」に変える。呼称の拡大により、例えば「兄弟」と呼び合う仲を広げるのである。このように何の関係もない異なるエスニックグループの人を自分たちの共同体に取り込むため、例えば実際は異なるにも拘らず、知人を義兄やオジと呼び合う。この時彼らにエスニックグループや言語を聞いても、そこがブラックボックスのままにされるのである（松田 1996: 210-20)。

このように互助行為は農村のみならず、都市においても顕著に見られる。しかも上述した例が示すように、必ずしも伝統的なものが踏襲されるのではなく、自分たちの生活の状況に合わせて可変的である。それは都市にあって人々が抱えうる様々な困難や、都市でのより良い生活を求めた人々の能動的な取り組みとして注目することができるだろう。

互助行為が人々の間でなさる一方で、そこでは争いも起こる。小さないさかい、言い合い、暴力、相手を否定するような態度などの全てを含めて本研究では争いと呼ぶ。上述した互助については詳細に論じられることが多いものの、争いに関してはその争いの詳細や役割について議論することが見逃されることが多い。むしろ重視されてきたのは争いがもたらす問題であったり、そこで合意形成される結果であったり、あるいはそもそも争いはどこにでもある程度存在するものとして見過ごされてしまったりしていた。生活実践という文脈に限った場合、争いは、共同体の規範に対する個人の自由という意味で多く検討されている。結婚や葬儀、居住地の決定に至るまで、個人の自由と共同体の規範との間での葛藤に悩まされる人々について多くの研究がある(松田 2009:54-88)。

本研究はこうした争いが日常生活の中でどのようになされているかを当事者のレベルから詳細に描く。事例であるカメルーンの首都ヤウンデ市における路上生活者は、日々の互助行為と同様に、日々争いを行う。それは食事の分配からドラッグの奪い合い、盗難に至るまで様々である。こうした争いは一見互助や人々の共同性を崩しかねないと捉えられる。一方で路上では日々新しく路上生活に加わる人もいれば、すぐにいなくなる人もいる。そうした流動的な場で、人々は日々多くの困難と対峙している。その場合、成員は、いついなくなるかもしれない他の成員との関係を重視するよりもむしろ、自分の主張をより強固に主張することが必要とされるのである。この点は第 3 章、第 4 章において詳細に論じることとなる。

1.2　研究の目的と調査の対象／方法

1.2.1　調査地と調査対象の選定

様々なバックグラウンドを持った人々が集まる流動的で異種混沌としたアフリカの都市にあって、人々は日々の生活の中で困難を抱えている。本研究は、そうした人々が困難とどのように対峙しているのか、そしてそれをどのような生活実践により乗り越えようとするのか、こうした問いに対し、前節で指摘したような、住民主導の互助行為を中心に明らかにすることを目的としている。とりわけ都市における人々の流動性と多様性に着目して、そうした社会的基盤の違いはどのように克服されるのかに焦点を当てる。

調査地としてカメルーンの首都ヤウンデ市を選定した。それは以下の二つの理由による。一点目は、カメルーンは250以上のエスニックグループが混在し、砂漠気候から熱帯気候まで様々な気候帯を持つアフリカのミニチュアと呼ばれ、都市部ではそうした多様なバックグラウンドを持つ人々が集まっている点である。このことは多様性に着目する本研究の視点と適している。また二つ目として、カメルーンは他のアフリカ諸国と異なり、100万人以上の人口を抱える巨大都市として2か所、ヤウンデ市とドゥアラ市がある。両都市には幹線道路が整備され、バスや乗用車での移動が頻繁になされ、また鉄道もあるなど、両都市間の人とモノの動きが頻繁になされている。また和崎はバムン王国における人々の都市間ネットワークに着目し、大都市のヤウンデ市、ドゥアラ市のほか、クンバ市、バメンダ市、ガウンデレ市、などの13のカメルーン各地の都市において、人々が連絡を取りながら、伝統文化を保持しながら互いに協力し合っている生活世界を描いている（和崎2001:34-45）。このように都市間の移動が頻繁になされるカメルーンの中で、首都であるヤウンデ市においても人々の移動は活発であり、流動性に着目を行う本研究の事例としてふさわしいと考えられる。その他、独立後のカメルーンではとりわけ大きな紛争や暴動は起こっておらず、また日本人研究者による調査も数多く行われており、一次資料が得やすく、比較的安全な調査が可能であると考えられた。実際に現地での活動にあったっては大学教員、学生との密に情報を交換して、より有意義な調査を行うことができたと考えている。以上よりカメルーンのヤウンデ市を事例として検討することとした。

また調査対象として路上生活者を扱う。路上生活者はエスニシティや出身地などの多様性を抱えている。また農村から都市、ある都市からまた別な都市へと多くの移動がある。さらに路上生活者は日常生活において多くの困難を抱えてもいる。このように路上生活者は静態的な生活を送っているのではなく、極めて流動的であり、様々な困難に直面した不安定な生活を送っている。こうした中でどのように互助行為がなされているのか、あるい

はなされていないのかを検討し、血縁という基盤が脆弱であり、多大な困難を抱える人々がいかに日々の生活実践を築いているかを明らかにすることができる。

1.2.2 調査方法

以上より本研究では互助を行っている個人や実際の生活を検討の対象とする。そのため以下の期間においてフィールド調査を実施した。ヤウンデ市でのフィールド調査は 2008 年 10 月から 2009 年 2 月(約 4 ヶ月間)、及び 2009 年 8 月から 9 月(約 1 ヶ月間)に行った。調査方法は質的調査法を重視し、主に参与観察とインタビュー調査を中心に行った。参与観察にあたっては、参与する際に、どのように路上生活者との関係性を構築するかに多大な時間を費やした。「カメルーンに計 50 人程度しかいない日本人の内の一人が、カメルーンで暮らす路上生活者となぜともに話をしようとするのか」、こうした調査される側としては当然浮かぶ疑問にどのように答え、そして路上生活者の生活の中に、筆者という人間を位置づけてもらうことが最初の目標であった。そこでは筆者がなぜ調査を行っているのかについて何度も説明する必要が当然あった。「「先進国」の人間が「途上国」の人間の貧しさについて知ろうとする」という構図を思い浮かべた人の多くが、筆者の調査に対して不愉快に思う場合は多くある。筆者は、こうした調査をする側とされる側という一種の権威関係をできる限り取り除くべく、様々な説明を行った。こうした説明の中には、カメルーンだけでなく欧米や日本にも路上生活者が多くいること、日本には格差と呼ばれ得るような現象があり、大金持ちばかりではなく厳しい生活を強いられている人々もいること、さらには筆者の生い立ちや家族構成などのプライベートな話も全てさらけ出し、筆者自身の悩みを打ち明けた。こうした説明が目指したのは、調査する側とされる側という関係を乗り越え、「ともに考える」関係となることであった。路上生活者には筆者と同じ 20 歳代の人々がかなり多くいたために、友人同士のような関係である。調査期間に限りがあったこともあり、これが達成されたかどうかは疑問ではあるが、少なくとも筆者が目指したのは、こうした「ともに考える」ことであった。もちろん、実際にともに頭を抱えて日々悩むのではなく、日々の生活の中にできるだけ一緒にいる時間を作り、その日の出来事や日本の話をしたり、道行く人々を指差して、あの人は高級車に乗っているとか、あの人はかっこいいとかきれいだとか、そうした何気ない会話を楽しんだりする中で行われる。筆者の参与は、こうした権威関係を取り除くことに焦点をおいて行われた。

またこうした参与はできるだけ長く、そして毎日のように顔を合わし挨拶をすることが重要なのだが、毎日同じところにいると周囲の住民から不審に思われたり、警察や憲兵に何らかの誤解を与えて取り締まりの対象になったりする危険があった。そのためどのぐらいの頻度、どのぐらいの時間訪問をするかも日々の検討事項の一つであった。

参与観察と述べた時、参与を通して行われるのが観察であるが、観察はほとんどともに過ごすことで自然と行っていた。つまり日々の何気ない会話や日常的な何気ない行動を見

たり聞いたり感じたりすることを通してなされた。

こうした参与の仕方を重視する視点から、インタビュー調査ではあらかじめ質問票を作ったり、順々に一人ずつ同じ質問を投げかけたりするようなことはあまり行っていない。なぜなら日々の生活の中で思い描く何気ないことや、実際に人々が考えることは言葉にしにくいことが多いためである。「日常生活では、「あること」が実践できるということで目的は達成され、次の相互行為へと展開していくのであり、そこで立ち止まって自分の実践の仕方を観察したり記述したりはしない」（北澤・古賀 2008:19-26）。本研究が人々の互助行為を中心に彼らの日常生活の把握に努めるものであるため、インタビューされて言語化されアウトプットするもののみならず、言葉にされない日々の何気ない言動への観察も重視している。日常生活の行動は、時に気まぐれであり、時に必死に考え出されたものであり、また時には新たな当人にとっても全く新たなものであったりするため、こうした研究手法を用いている。また事実関係を正すために、日にちを置いて同じ質問や話題について再度話をしたり、その人の友人にも話を聞いて辻褄が合っているかを確認したりすることを行っている。

1.3　本論文の構成

以下、各章を概観する。ここまでの第 1 章では、研究背景として、アフリカ都市の拡大を歴史的に概観した上で、都市において人々が抱える日常生活上の困難とは何か、それを乗り越える互助とは何かを示した。その上で本研究の目的と意義、調査対象、調査方法を示した。この後、第 2 章では事例として検討するカメルーン・ヤウンデ市についてその成り立ちを中心に概観する。その上で本研究が対象とする路上生活者とは誰かを、都市で生活を送る様々な人々の生活に言及しながら示す。第 3 章では路上生活者の生活をその互助行為を中心に詳細に描き、その上で人々の様々な争いについての事例を示す。第 4 章では、流動的で異種混交とした都市の日常世界にあって、互助行為と争いのあり方とその関係性について明らかにし、結論とする。

第2章 カメルーン・ヤウンデ市の路上生活者

はじめに

本章ではカメルーン・ヤウンデ市における路上生活者について、その規模や分布、路上に至るまでの背景を明らかにする。まずカメルーンの首都ヤウンデ市の歴史的発展過程を検討した上で(2.1)、ヤウンデ市の路上ではどのような生活を人々が行っているかを明らかにする。その上で、路上生活者の分布と、なぜ路上で生活することになったのか、その背景を検討する (2.2)。

2.1 カメルーン・ヤウンデ市概観

2.1.1 カメルーンの形成過程

カメルーンは中央アフリカ諸国の一つであり、人口約 1800 万人、10 の州に分けられている。面積は 475,440 ㎢と、日本より少し大きい。カメルーンには 250 以上のエスニックグループが暮らし、北は砂漠気候から熱帯雨林気候まで様々な気候帯があり、アフリカのミニチュアと呼ばれている。第 1 章で述べた都市の分類では、ヤウンデ市、ドゥアラ市はともにB型、つまり植民地支配を経て急速に建設された都市とされる。しかし沿岸部にあるドゥアラ市は、それ以前からヨーロッパとの交易がなされていた。15 世紀にポルトガルが沿岸部を中心に支配を拡大し始め、カメルーンでも 1450 年から沿岸部の都市ドゥアラを拠点として貿易を始めている。ポルトガルは砂糖、織物、容器、銅、アルコールを輸出し、胡椒、魚介類、象牙、そして奴隷を輸入した。カメルーンという国名もこの頃、ポルトガル人がカメルーン近海のギニア湾で取れるエビにちなんで、エビの川(rio dos Camarões)と名づけられたことに由来する。本格的な植民地支配は 1884 年にドイツの保護領となったことにより始まる。その後ドイツは内陸への進出を進め、1921 年にヤウンデを首都とすることを決めた。第一次世界大戦でドイツが破れると、1922 年にカメルーン西部がイギリス、東側がフランスによる委任統治領となり、それぞれ「西カメルーン」と「東カメルーン」として統治されることになった。そして 1960 年に東カメルーンが、1961 年に西カメルーンが独立、両国がそのまま合併した。そのためカメルーンでは英語とフランス語が公用語となっている(野元 2005:30-2)。

その後、1961 年から 1982 年まで大統領となったのが、アーマドゥ・アヒジョ(Ahmadou



図 1 カメルーンの地図(筆者作成)

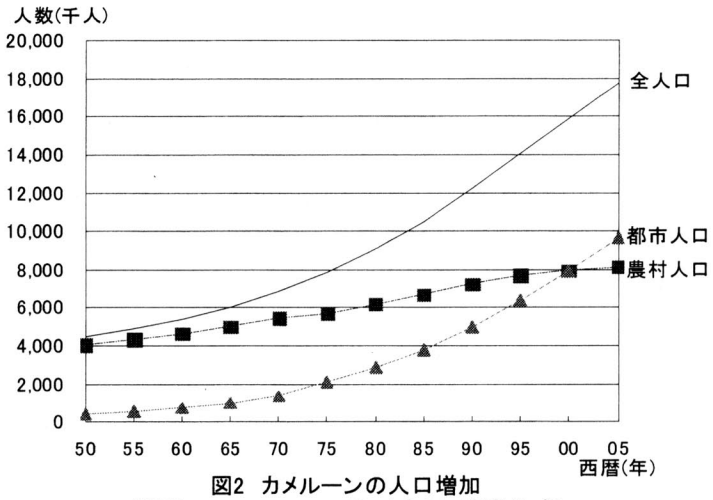

図2 カメルーンの人口増加
(出所:United Nations2007をもとに筆者作成)

Ahidjo)である。独立後は、フランス、イギリス系資本により経営されたプランテーションはカメルーン政府により次々と買収され、多くの国営企業や開発公社が生まれた。また政府主導により価格統制や貿易の制限などが行われた。1978 年からは石油の輸出が本格的に始まり、コーヒーやカカオ、バナナなどの一次産品の値段も高値で維持されたこともあり、年平均 8 パーセントという高い経済成長を維持していた。しかし 1986 年から、製油や換金作物の値段が下落し、一次産品に頼っていたカメルーン経済は大打撃を受け、他のアフリカ諸国同様、IMF と世界銀行を中心に構造調整計画が実施されることとなった。国営企業の民営化や公務員制度改革、貿易制度の自由化と価格統制の撤廃などが行われ、同時に政治改革の声も高まり、1990 年には複数政党制の導入が行われた。その後 1992 年に行われた大統領選挙では、「カメルーン人民民主連合(RDPC: Rassemblement Démocratique des Camerounais)」のポール・ビヤ(Paul Biya)現大統領と、「社会民主戦線(SDF: Social Democratic Front)」のフル・ンディ(John Fru Ndi)の一騎打ちとなったが、ビヤが五選目を果たした。複数政党制が導入されたものの、一党支配の状況は今も続いている。2008 年 2 月には選挙制度改革に関する法律を制定したため、ビヤの再選に反対する人々の間で暴動が起こった。

こうした官僚や政治の腐敗、また構造調整計画を経て、現在も携帯電話会社などの海外企業の誘致を進めたり、国営企業の民営化による再編を行ったりしているものの、そこでは人々の間に大きな所得格差が生み出されたとも言われている。たとえ大学を卒業していたとしても、何らかの縁故が無い限りフォーマルな仕事に就くことは困難であり、また都市で求められる仕事は知的労働者であった。ドゥアラでは手押し車でサンダルを売り、1 日わずか3〜5 ドルを稼ぐ人々の3人に 1 人は、大学を卒業した人であるという(Sikod2001)。

2.1.2 ヤウンデ市の拡大

本研究の対象となるヤウンデ（Yaoundé）市は、カメルーンの中央州ムフンディ(Mfoundi)県にある。カメルーンは 1884 年にドイツにより支配され、その後フランスとイギリスによる植民地支配を経て 1960 年に独立した。ヤウンデ市は 1888 年に象牙貿易の拠点としてドイツに建設され、その後フランスによる植民地支配、独立を経て発展を遂げた、植民地支配による影響を強く受けた都市である。ヤウンデ市の人口は 1976 年の時点で 31 万人だったが、2005 年には 148 万人まで増加している(図 3 参照)。

ヤウンデ市はギニア湾から北東方向へ約 250 キロメートル、海抜 750m のところにあり、そのため気温は比較的低く過ごしやすい。先に述べた通り沿岸部にあるドゥアラ市は植民地支配以前の 15 世紀頃からヨーロッパと貿易を行っていたのに対して、ヤウンデ市はドイツの保護領としての支配が始まって以降、ドイツが内陸部に進出してきて「ヤウンデ駐屯地(Yaoundé-Station)」が建設され初めて本格的な拡大を始める。この辺りではベチ(Beti)と呼ばれるエスニックグループが居住していた。ドイツは元々ドゥアラを首都にしていたが、その後南西部州のブエア市に首都を移転、しかしそこで地震があったためドゥアラ市に再び首都を移した。その後植民地支配を行ったフランスは、ドイツが沿岸から攻めてくることを恐れ、1921 年、内陸部のヤウンデ市を首都におくこととした(Franqueville1984)。

図 3　ヤウンデ市の人口変化

西暦(年)	人口(人)
1926	5,865
1933	6,500
1939	9,080
1945	17,311
1952	31,783
1953	36,786
1957	58,099
1962	89,969
1964	109,185
1969	165,810
1976	313,706
1987	649,000
2001	1,248,200
2005	1,489,000

出所：1926 年から 1976 年は Franqueville(1984)、1987 年、2001 年は Institute National de la Statistique(2007)、2005 年は United Nations Population Division(2008)より筆者作成。

とりわけアフリカでは国内の一つの都市が巨大化することが多いのだが、カメルーンは珍しく二つの巨大都市を抱えており、歴史的にみた場合ヤウンデ市、ドゥアラ市とともに政治的、経済的に重要な役割を果たしてきた経験がある。現在ヤウンデ市は政治首都、ドゥアラ市では経済首都と呼ばれている。

2.1.3　ヤウンデ市における小規模自営業と物乞い

次にヤウンデ市における人々の生活を、路上における人々の主な活動に焦点を当てて検討する。ここでは所得を得るための物乞いと小規模自営業を挙げる。なぜならこれらは後述する路上生活者も行っている金銭獲得手段の一つであり、またこうしたインフォーマルな仕事に関する多くの研究がその市場規模の大きさと重要性、人々の生活に欠かすことのできない場である点を指摘しているためである(Maldonado1987)。

(1) 物乞い

物乞いとは、毎日のように路上に座り込み、道行く人に声をかけながら、お金を恵んで

もらうように促すことを指す。身体障害者(ハンセン病)も多数いる。彼らの多くは北カメルーン(アダマワ(Adamaoua)州、北部(Nord)州、極北部(Extrême-Nord)州の 3 州を指す)やナイジェリア、ニジェール、チャドなどの周辺国から国内紛争や政治情勢の悪化による争いを逃れるために、あるいは旱魃の被害により食料が十分に得られないために、都市でお金を稼ぐことを目的として都市に来る。例えば 2008 年 7 月からの洪水により、ヤウンデ市に 100 家族が家を失い移動している(International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies2008)。彼らは、日中は物乞いを行い、夕方から夜になると自分たちの家に帰る。家では数人が一緒になって 1 部屋を借りそこに雑魚寝をするか、路上で寝泊りを行っている。路上で寝泊りをしている点から、筆者が対象としている路上生活者の定義に含まれることになるが、多くの場合物乞いを行う人々は故郷とのつながりが強く、物乞いという比較的はっきりとした目的を持ち都市にいる点から、その特徴が路上生活者とは大きく異なる。物乞いを行う人々の多くはイスラーム教であり、学校でもしばしば物乞いを一つの仕事として教わることもある。1 日の間に物乞いにより稼ぐことができる額は 1,000FCFA～3,000FCFA である[2]。稼ぎには個人差はかなりあるようであるが、日々の生活に絶対的に困るわけではない程度の稼ぎを得ている。

(2) 小規模自営業

小規模自営業とは、ヤウンデ市でプチ・メチエ(petit métier)、つまり人々の間でしばしば「小さな仕事」と呼ばれるものを指す。いわゆるインフォーマル・セクター[3]と呼ばれる。例えば野菜や果物、お菓子といった食料品、CD、DVD、ラジオ、延長コードといった電気商品、洋服、靴、鞄などを路上でビニルシートに広げて、もしくは木の台を作りその上で販売したり、商品を持って街を歩きながら、道行く人に声をかけたり、飲食店の中でそれを見せて販売したりする仕事を指す。こうした仕事は次から次へと人々の独自の工夫により生み出される。例えば卵、ハム、フランスパンを多く買ってそれを道で料理して売る人もいれば、魚をその場で焼いて調理して売る人もいる。これらの商品の値段は、大体の相場が人々の間で決まっているものもあれば、お互いの交渉により決まるものもある。カメルーン都市部において、こうしたインフォーマル部門における仕事に従事する人々の割合は、就業人口の 67.4 パーセントに及ぶ。公共機関、民間を合わせたフォーマル部門の仕事に従事するのは 12.3 パーセントであることと比べると、こうした小規模自営業がいかに都市居住民の多くの人々にとって馴染み深い仕事であるか理解できるだろう。こうした小

[2] カメルーンにおける貨幣の単位は FCFA(フランスセーファ)である。1 円=5FCFA である(1 ユーロ=130 円の場合。1 ユーロ=655.957FCFA は固定)。例えば庶民の足として大変多く利用される乗合タクシー代は 200FCFA 前後、食事は 1 食 300FCFA から、ビール 1 本 500FCFA 前後である。

[3] インフォーマル・セクターとは、公的機関に認められているフォーマル・セクターではない比較的小規模な事業を指す。ヤウンデ市のインフォーマル・セクターを調査している野元は、インフォーマル・セクターにおける仕事は「自分たちで何とかやっている」(se débrouiller) という言葉で表わされる点を強調する。後述するように、本稿でもこうした自分たちで能動的創意工夫を以て生み出される事業を指すこととする(野元 2001)。

規模自営業はしばしば家族単位でなされ、子供たちも多く参加する[4]。例えば頭に落花生の入った大きなお皿を頭に載せて、あるいは手にゆで卵やソヤ(焼き鳥のようなもの)を持って町を歩きながらそれを売る姿は至る所で目にする。親が子供にこうした仕事をさせることは多い。これは「ストリートチルドレン([英]children on the street)」や「児童労働」と呼ばれる社会問題として一般的に捉えられるかもしれないが、カメルーンでは働く子供たちのことをストリートチルドレンと呼んだり、彼ら子供たちの労働を問題視したりすることはほとんどない。カメルーン国内では5歳から14歳の子供のうち31パーセントが、何らかの仕事を行っている。さらに学校に通いながら働く子供 の割合は、5歳から14歳の学校に通っている子供の内80パーセントにのぼる(Ministry of Economy, Planning and Regional Development, National Institute of Statistics and United Nations Children's Fund 2006:3-4)。仕事の内容は、お菓子やフルーツ、野菜などの食べ物を調理し売ったり、家族のそれを手伝ったりする。またこうした子供達が働く理由は、必ずしも家庭の収入を補う為だけではない。十分な所得のある家庭でも、将来ビジネスをするために、子供のうちからお金を貯めておく人や、商売の練習のために働いている人もいる。「学校に行きながら商売をしている子供は多い。学校に通い続けることはフォーマル・セクター就業へ望みをつなぐことだが、それが失敗に終わったとき、子供の頃の商売の経験は、方向転換してインフォーマル・セクターへと参入する柔軟性を与える」のである(野元 2001:272-3)。

2.2　路上生活に至るまでの背景

2.2.1　路上生活者の分布、出自

本研究で検討する路上生活者とは、昼夜を問わず空き地、建物の裏、公園などで生活、寝泊りをする人々を指す。ヤウンデ市においてその多くは10歳前後から30歳代までの比較的若い世代の人々である。彼らは路上やスーパーマーケットの前、空き地など様々な場所を生活の拠点としている。家族同士ではなく、友人や知り合いが5名から30名ほど集まって生活をしており、日々の生活を一人で過ごすことはほとんど無い。本項では以下、(1)路上生活者の生活の場所や人数、(2) 彼らの出自はどのようなものかという二点について述べる。

(1) 路上生活者の規模と生活場所

路上生活者はヤウンデ市の様々な場所で暮らす。中でも筆者が中心的に調査を行った、路上生活者が最も多く集まる地区の一つである中心街(Centre-ville)地区の路上生活者の分布が次ページ図4である。この図は筆者が滞在中に実際に歩き路上生活者とともにどこ

[4] 教育は義務教育としての小学校6年間、中学校3年間、高など学校3年間、大学3年間がある。原則として義務教育は無償である。

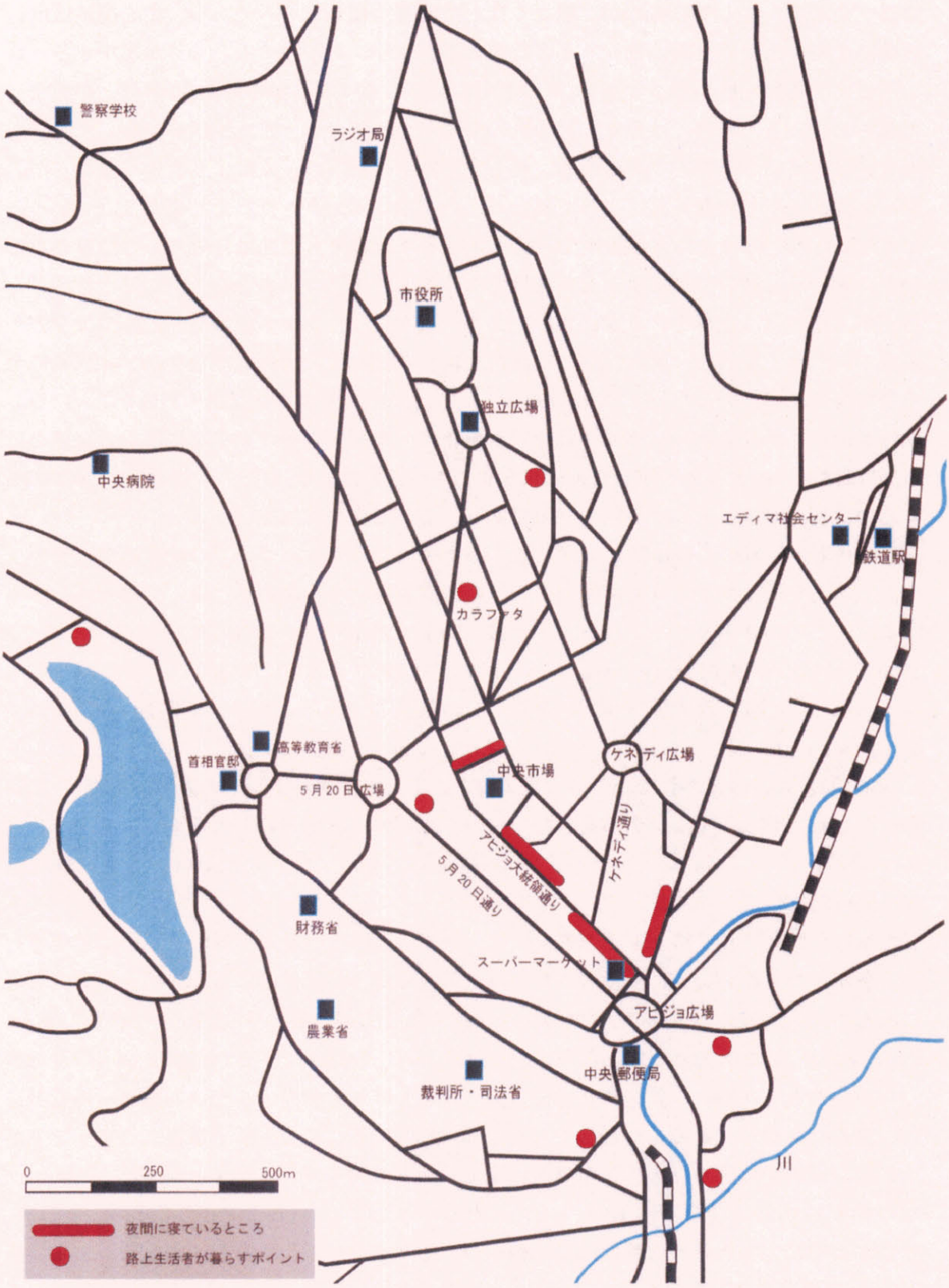

図 4　ヤウンデ市：中心街地区及びその周辺図[2009 年 1 月]（出所:筆者作成）

に路上生活者が住んでいるのか、隈なく探して明らかにしたものである。中心街地区は行政機関や中央市場、公園、物売りが多数集まる、ヤウンデ市内の人とモノが集中する、最も活気に満ちた地区の一つである。その市内のあちこちに5名から最大30名ほどが集まって暮らしている。本稿では以下、図の丸い点で示されている、路上生活者が暮らす場所を便宜的にポイントと呼ぶこととする。彼らが寝るポイントは、人により大きく異なるが、ずっと同じ場所ではなく日によって異なり、色々なポイントを行ったり来たりしている。

また彼らはそのほとんどが男性で、路上生活者に聞いても女性は自分たちとは暮らしていないという。彼らの話によると、女性であり路上を生活の拠点とし、かつ路上生活者と接点があるのは、売春を行う女性だけである。彼女らはヤウンデ市のあちこちでは夕方から夜中にかけて現れる。例えば中心街地区では、北側の市役所付近からケネディ広場に至るまでの道に多くいるが、そこでは女性3〜5名と、支配人のような立場の男性が1人いる。女性が道行く男性を誘い、売春行為を行う場合は、支配人の男性を中心に値段の交渉を行う。値段は内容によって1,000FCFA〜10,000FCFAが相場である。外国人の場合は30,000FCFAくらいは要求する。近くに専用の部屋があり、そこで売春行為を行う。

次に路上生活者の人数に関して述べる。路上生活者の人数についての統計調査は無い。しかしストリートチルドレンに関しての行政の調査はいくつかあり、以下ではそれを参照する。ここでのストリートチルドレンとは、路上で寝泊りをする18才以下の人々を指す。1999年に都市省(Ministère de la ville)により、ヤウンデ市には450人のストリートチルドレンが確認された。その後2005年の社会問題省ムフンディ県局(délégation départementale des Affaires Sociales du Mfoundi)の調査によれば、ストリートチルドレンは981人と確認されている。また州毎のストリートチルドレンの人数の調査が2002年になされており、ヤウンデ市を含む中央州、東部州、北部州の3州を除くカメルーン全体で1677人のストリートチルドレンが確認されている(Ministère des Affaires Sociales2008)。

これらをもとにして路上生活者の人数についてある程度の目安を付けることは可能である。各ポイントにおいて、子供の人数よりも大人のほうが圧倒的に多く、図4の中央部分にあるポイントの一つカラファタ(Calafatas)で暮らす路上生活者は、筆者計測時で25人、内18才以下は12人であった。なおカラファタとは、地図上で示されたポイントの近くのパン屋のことである。カラファタは在カメルーンの欧米人やカメルーンの高額所得者が買いに来る有名なパン屋の一つとして人々に知られている。路上生活者が集まるポイントがそのパン屋のすぐ傍のため、この場所は路上生活者の間でカラファタと呼ばれる。また別なポイントでは18才以下は15名中5名、別なポイントでは20名中0名が子供であった。したがって路上生活者の人数は低く見積もってもストリートチルドレンの3倍、すなわち2007年の調査の数字を使うならば、路上生活者はヤウンデ市に約3,000人以上は暮らしている計算になる。先に指摘したように路上生活者は同じ場所で寝ない人も多く、あるいは後述するが昼間に働く者もいれば夜間に働く人もいる。さらに一時的に友人の家に転がり

込んだかと思えば、また路上にすぐ帰ってくる人もいるなど、各ポイントの人数の変化は激しい。筆者の調査では、図にある路上生活者が最も集うと言われる場所の一つである中心街地区とその周辺では約 150 名の路上生活者が暮らしている。

(2) 路上生活者の出自

出身地という観点からみた場合、ヤウンデ市における路上生活者のマジョリティは北カメルーンから来た人々である。北カメルーンの人口はカメルーン全体の人口の 29.7 パーセントを占めている。また場合によっては隣国のチャドやナイジェリアも含めて呼ばれる。路上生活者が暮らすポイント毎にどれぐらい北部出身者がいるかを計測したところ、あるポイントでは 30 名中 25 名が、また別な場所でも、25 名中 18 名が北部出身であった。社会問題省の「ストリートチルドレン問題」担当者に話を聞いても、ストリートチルドレンの多くは北部地方から来ているという。このように北部と括ってその出身地が語られる一方、そこには多様性がある。例えば日野[5]によれば、アダマワ州のエスニックグループだけでも、バヤ、ラカ、ボロロ、ブーム、ドゥル、フルベ、ハウサ、ボルヌ、アラブ・ショワ、カカ、クーティン、ニャムニャム、ブテ、ティカルなどがいる(日野 1987)。また宗教もキリスト教とイスラームが混在している。ちなみにカメルーンの経済首都と呼ばれるドゥアラ市では、こうした北部出身の路上生活者が多い傾向は見られず、むしろ西部出身が多数を占める。西部とは北西部州、西部州を指す(L'institut de Recherche et des Etudes de Comportements2000)。

北部出身者が多い理由を、路上生活者やその他筆者の調査協力をした複数名の人々から聞いたことをもとに、以下の二つの点を述べておきたい。一点目は、北部の人々が出稼ぎや現在の生活を改善しようとして都市を目指す場合、ヤウンデ市が最も行きやすく、「安全」である、という点である。最も行きやすい、というのは交通の便、具体的には鉄道や道路の整備が進んでいるということである。カメルーンには鉄道がドゥアラ市から北上しヤウンデ市を通ってガウンデレ(N'Gaoundéré)市にまで延びている。鉄道の速度は遅いため、何人かの路上生活者は走っている鉄道に飛び乗ってヤウンデ市に来たと証言している。さらに国道 1 号線がヤウンデ市から極北部州にまで比較的しっかりと整備されている。このようにカメルーン国内でみれば、北部からヤウンデ市のアクセスは比較的容易である。

加えてヤウンデ市は一般的に「安全」と言われている。これは周辺の都市と比べて述べられている。例えば隣国のナイジェリアの首都アブジャやラゴスは、治安が極めて悪いことで知られている。またカメルーン国内で大きな都市はヤウンデ市とドゥアラ市だが、経済の中心地であるドゥアラ市はヤウンデ市に比べれば治安が悪く、加えて高度が低いため気温がとても高く暑苦しく、過ごしにくいという。それに対してヤウンデ市は、行政機関が多数あることもあって治安が良く、また高度は 750m 程のところにあり、年間の平均気温

[5] 例えばアダマワ州の州都であるガウンデレ市では、部族間の複雑な関係性や生業分化がある。日野(1987)を参照。

は23度前後と、高温多湿のドゥアラ市と比べてかなり過ごしやすい。これらの理由から、ヤウンデ市は北部地方の人々にとって選択されやすい場所となっている。

二点目は北部の家庭環境の影響である。以下は筆者があとに述べるAと呼ばれる人物とその周りにいた数名の人々の話をもとに構成した、北部地方の人々の生活である。

Aと Aの周囲にいた路上生活者による北部地方の家庭状況に関する証言

もし母親が亡くなった場合、子供は別な母親のところに引き取られる。北部の村では一夫多妻が色濃く残っており 、また通常子供を育てるのは母親であるとされるため、子供は父親が暮らすところとは別場所の、母親が暮らす家で育つ。しかし母親はお金が十分に無いにも拘わらず無計画な妊娠・出産を行い子供だけが増えるので、引き取った子供を本当の子供と平等に世話をすることがかなり難しくなる。また稼ぎ手である父親が亡くなった場合、残された母親達とその子供は、仕事も無く親戚や近隣の住民を頼るしかない。しかし周りの人々も同様に貧しい生活を強いられてことがほとんどであり、彼らは以前にも増して貧しい生活を送る。最悪の場合親子で、あるいは子供が路上での生活を強いられることもしばしばある。そしてこうした貧しさは、計画性の無い結婚が原因の大きな一つであるという。すなわち多くの人数を養うだけの収入が無いにも拘わらず、男は多くの妻を持ち、女は多くの子を生むのである。

こうした北部地方の貧困と「伝統」が原因であるという語りは多くあり、同様の証言を他の北部出身の人々にも、行政の人々にも、また筆者の調査協力者の証言からも得た。一夫多妻に関してだが、カメルーンにおいて結婚している15歳から49歳の女性のうち、一夫多妻の人は28パーセントにのぼる。とりわけ北部地方であるアダマワ州が38パーセント、北部州が42パーセント、極北部州が42パーセントにのぼっており、北部地方は他の地域より割合が高い(Ministry of Economy, Planning and Regional Development 2006)。

確かに、こうした一夫多妻が多いことと、貧困が重なり、子供たちや若者たちがお金を得るために都市へ行くことが要請される構造は想定できるかもしれない。しかし上述した家庭環境が北部地方に共通するかどうかは、慎重に検討する必要がある。例えば先に述べた証言は筆者の加筆・修正があるものの、いかに西洋的な生活環境と異なるかを意識した説明がなされている。そこには北部地方の多様な生活環境を彼らが一面的に捉えることによってなされる説明であり、現実とは異なる思い込みで語られている可能性は大いにある。この点を、次項でなぜ路上生活者が路上での生活を選んだかについて検討をすることで分析する。

以上、なぜ北部出身の人々がマジョリティとなっているのかという疑問に対し、(1) ヤウンデ市への移動が比較的容易で、また「安全」である点、(2) 北部の貧困と「伝統」が関連していると語られている点の二つの示唆を述べた。

2.2.2　路上生活という選択

路上生活者の多くはヤウンデ市出身ではない。彼らが路上生活を始める以前はどのような生活を送っていたのだろうか。そこから路上生活を選択した(もしくは、選択せざるを得なかった)背景を、いくつかの彼らの証言から検討する。

S(10 歳・男)の場合

ガウンデレ市から来た。母は小さいときに病気のため亡くなった。その後オバの家で暮らすことになったが「住み心地が悪かった」。兄は家を出てヤウンデ市に行ったという話を聞き、自分も兄を頼って家を出ることを決意した。しかし今でも兄を見つけられていない。「住み心地が悪い」というのは、オバの家で、もともとその家で暮らす実の息子や娘と、自分への対応が余りに異なったためである。例えば学校には行かせてもらえず農作業をするよう指示されたり、彼らとは一緒に食事をさせてもらえなかったりした。

M(17 歳・男)の場合

北西部州にある村から来た。父親が浮気をし、自分の母親との関係が悪化し離婚した。その後、浮気相手の家で暮らすこととなった。しかしそこでの生活に馴染めず家を出ることを決意。ドゥアラ市、ブエア(Buea)市などを点々とし、ヤウンデ市に来た。ヤウンデ市は他の都市に比べ比較的安全で食べ物も探しやすいため、居心地は良いという。

A(31 歳・男)の場合

ヤウンデ市に来たのは 11 歳の時。以来 20 年間路上での生活を続けている。ガウンデレ市出身。父母が離婚した後、母親と二人きりでガウンデレ市の路上で暮らしていた。父親には多くの妻がいた(何人かは把握できていなかった、忘れた)。その後母親は父親と離婚した。母親は離婚する前から精神的に不安定(la folie)であったという。ある日母親がトラクターに轢かれ亡くなった。一人になった。その後仕事や食べ物を求めてヤウンデ市に来ることを決意した。

このように家庭の問題をきっかけとして都市に来る人々は多い。最初の S のように、母親や父親が亡くなっているケースは多く見られた。ただし追記すると、S は、友達 5 人と一緒にヤウンデ市に来ている。5 人は親戚関係ではなく、あくまで友達であった。5 人全員が家庭内の問題を抱えているわけではない。筆者の印象としては、家庭の問題云々もあるが、友達 5 人と一緒にいることにより列車に飛び乗って都市に向かって出て行くという冒

険心のようなものが生まれ、そのままヤウンデ市に来たと感じられた。

またテレビを見れば、彼らは都市の巨大な建物や多くの人々をみて、それに憧れる、といった状況は起こり得る。実際にお金を稼ぐために来たと言う15歳前後の人々の多くが、そうした都市への憧れ、例えば都市で仕事をして大もうけするという「夢」を抱いて都市に来ている。つい1日前にヤウンデ市に来たという10代後半の男性は、ヤウンデ市到着後1日にして路上生活者の仲間入りを果たし、路上での生活の仕方を教わっているところであった。彼が筆者との話の中で繰り返し主張していたのは、「仕事がほしい、仕事をしてお金を稼ぐためにヤウンデ市に来たのだ」ということであった。

その他、路上に出てきた理由として以下のような証言もある。

・両親が死亡し、別な家族に引き取られたが、学校にも行かせてくれず、邪魔者扱いばかりされたのに耐えられなくなった。

・友達とシンナーやマリファナを吸いたくて、家では両親に怒られるため外で吸うようになり、それが両親にばれて、そこで喧嘩をして家を飛び出した。

・両親にとって学校に通うことよりも商売の術を身につけることが重要と言われ、子供のうちから家を出て行かされ都市で稼いでくるように指示された。

・軍隊で働いていたが、武器を外部に売ろうとして逮捕された。その後刑務所を脱獄した。

・ただ面白そうだから友達に付いてきて気づいたら路上にいた。

人々が路上生活者となる所以は一概には説明できない。しかし路上生活となる人々の共通点として、親戚や同じエスニックグループなどの人々との関係性が著しく弱くなってしまっている点は指摘できる。弱くなるとは、例えば何らかの理由で親族との関係性が悪くなった、関係性自体を失ってしまった、あるいは自ら関係性を絶ったことを言う。先に述べたように両親が亡くなったり、しかも両親以外の親戚との仲が悪かったり、また麻薬を使用したり罪を犯すなどで親戚が自分を相手にしてくれなったり、反抗期のため、あるいは両親の不仲を見ていられないために、自ら関係性を絶つなどである。行政による社会保障サービスがほとんど提起されてない状況下にあって、血縁を基盤とした互助は第1章第2節第2項で指摘したように、日々の困難への取り組みとして重要である。路上生活者の場合こうした血縁の希薄化により互助行為に参与できない場合、人々はより多くの困難を背負うことになる。

以上、第2章ではカメルーン・ヤウンデ市の成り立ち、ヤウンデ市の路上で生きる人々を概観しながら、路上生活者の出自と分布を明らかにし、なぜ彼らが路上で生活をしているのか、彼らの証言を示した。続く第3章では、こうした路上生活者が日々どのような生活を送っているのか、互助行為と争いに着目しながら検討を行う。

第3章 路上生活者の日常生活と互助／争い

はじめに

本章は路上生活者の日常生活を彼らの互助に着目しながら描き(3.1)、一方でそうした日常生活の中にどのような争いがあるかを検討する(3.2)。互助行為は先行研究にある講に見られるような組織化や、日常生活に大きな影響を与える規模の大きなものは見られない。ここで見られる互助は極めて小規模で、当事者自身が特に意識せずとも行っている。重要なのはこうした互助が日常生活のあらゆる場面で見られ、その中で争いが互助を基盤とする生活の中にどのように起こっているのかという点である。

日常生活とは、無意識的にその人のルーティンに埋め込まれている毎日ほとんど変わらず行われている言動であり、以下の第1節ではそれを4つの生活の場面に分けて考えていく。それぞれの場面は、筆者が、互助が典型的に多くみられると考えられたものを選び、その場面の様子をできるだけに中心に描くことを行っている。

3.1 路上生活者の日常生活

3.1.1 お金を得る

「子供の方が目ざとくお金を得る方法を見つけられるかもしれない。大人のほうが細かい、丁寧な作業ができるのかもしれない。ま、いずれにせよお金を稼ぐ方法なんていくらでもある。」こう述べるのは洗い場(写真1参照)で自分の体と服を洗いそれを下着1枚姿で干す、ある一人の男性であった。路上暮らしを始めて十数年、年齢は30歳代後半である。路上で暮らすと言うが、彼には今小さいが家がある。また彼の兄はタクシードライバーをしている。兄は家が無く車の中で寝泊りをしている。彼が干しているのはカメルーンでは日常の服装として着られているサッカーのユニフォームと短パン。

「その辺りの店(飲食店)の皿洗いを1、2時間、ペットボトルやビン集め、少し資金があれば物売り、子供なら物乞いをしてもどうにかお金は手に入る。もちろんそれで十分な額のお金を、安定して得られるかは別だが。けどそれを言い出したら、ヤウンデ市中の多くの人々が(フォーマルな)仕事を持っていないのだから、(路上生活者であろうとそうでなかろうと)話は同じだが。」ヤウンデ市において人々は様々な工夫をこらして仕事を生み出す(第2章第2節第2項参照)。勿論それは路上生活者にも当てはまる。以下でそのいくつかを紹介する。

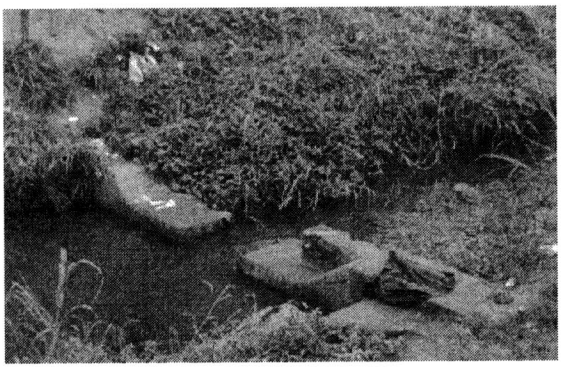

写真1　洗い場（筆者撮影）



写真2　露店での残飯（筆者撮影）

「タカシ、見てくれこれを。」Hは自慢あり気にいくつかの工芸品を持ちだした。カメルーンの国旗の色である緑、赤、黄色をあしらった80cm程の立派なバトンである。その数日後、彼はTAKASHIと名前の入ったバトンを作ってくれた。誇張なしにそれは素晴らしいでき栄えの作品であった。Hは自分の手先の器用さを利用してこうした工芸品作りをある店で手伝っているのである。給与は月5,000から10,000FCFAで、この額だけでは一人だけで家を借りたり食事などをしたりしていくことは困難だと説明してくれた。こうした工芸品作りの仕事は、Hの紹介で3名ほどの路上生活者が行っている。

「水はいらんか〜水、水、水、水！」タンクをリヤカーで引き、小さなカップをいくつも持って歩く男を鉄道駅で見かける。彼の仕事は道行く人にカップ1杯の水を売ることである。カップ1杯25FCFA。水を買う人はその場でそれを飲む。ヤウンデ市は比較的涼しく過ごしやすいと言われるが、それでも日中は日が照って暑い。そのためこうした手軽に水を飲むことのできる場の需要が高まるのである。

その他、プラスチックケースにパンやジュースを入れて売り歩く人々もいる。高級レストランの前に並ぶ車を洗車する人々もいる。先にも述べたとおり、こうした仕事は路上生活者ではない人々も行っている。これは人々が様々に生み出すものであり、例えば金銭を多く持っていれば、雑貨を買い込んで売りに歩くこともできるかもしれない。そしてこれらの仕事を得るには、別な仕事をするために今まで使っていたものを別な人に受け継いでもらったり、自分がしている仕事を他の人に紹介したり、初期投資できる少し多めのお金を出資し合ったりする必要がある。これは路上生活者であろうとそうでなかろうとなされる重要な互助行為である。

ではこうした伝手がなかったら、初期投資するお金がなかったら、あるいは公用語であるフランス語が十分に使えなかったら、人々はどのようにお金を得るのだろうか。

夕方16時頃、中央市場の近くにペットボトル集めをする3名の子供たちがいた。手には大きめの袋を持ち、使い終わったペットボトル、ビン、プラスチックケースなどを入れている。町のあちこちにある大きなゴミ箱を探ったり、路上で物品を販売している人々に声

をかけたり、周辺に落ちているものはないか探したりしながら町中を歩く。日中は暑いので、日が傾きだす16時頃から、暗くなり始める18時過ぎまで歩き続ける。

ペットボトル集めは10歳代の比較的若い路上生活者が行う仕事の一つである。これは一人で生活していてはできず、多くの人数で協力して行われる必要がある。なぜならペットボトルを何日間も盗まれることなく保管し、多くのペットボトル洗ったり、モコロ(Mokolo)地区に売りに行ったりしなければならない。こうした作業は一人では困難であり、互助が必要である。集めたペットボトルは通常1本1本綺麗に洗い、ナイロン製の大きな袋の中に集められ、モコロ(Mokolo)地区で売られる。多くの場合1.5Lのペットボトル約50本が入っており、一袋2,000～3,000FCFAで売る。その他、ウイスキーなどのビンやプラスチックケースも売る。一人で数本を集めてそれを売るのではなく、皆で集め、それを徐々にたくさん貯めてから売るのである。こうして大量のペットボトルを貯めることは路上生活者が暮らすポイント毎で行われる。従って10歳代の人が暮らすポイントならばどこにでも大きな袋が置かれ、ペットボトルを貯めている。先に述べた子供たちによれば多くて1日に25本ものペットボトルを集める。ペットボトルはスーパーマーケットから小さなブティックに至るまで様々な場所で売られ、1.5L入りのミネラルウォーターや、ジュースを入れるのに使われ多くの人々が利用している。集めるだけの手軽にできる仕事のため、多くの路上生活者が行っている。

その他、山のように積まれた使い捨てられたサンダル、服、コンピュータ部品、インクカートリッジなど々を修理して、あるいはバラバラにして再び売ることも、お金を稼ぐ方法の一つである。これらはごみ箱から探してきたものがほとんどである。また車がパンクした際に、トランクにあるスペアをつける作業を運転手の代わりに行うこともある。車を持つ人は多くの場合ある程度お金を持っているので、手が汚れるタイヤ交換の作業を素早く丁寧にこなしてくれる路上生活者の仕事ぶりに思わずたくさんの小銭を渡すことも多い。

そして物乞いも行う。これは子供たちが得意である。通常は一人か少数の人数で行う。欧米人や見た目でお金を持っていそうだと感じられる人には特に頑張ってねだれば得られることが多い。一般の人も個人差はあるが子供に何も渡さず放っておくのは「良心が痛む」(調査協力者、及びその友人談)ため、できる限り協力したいとは思い、小銭を渡すことも多いとのことであった。

このように、互助行為を通しての現金獲得が様々な工夫の下に行われる。とりわけペットボトル集めは子供たちにとって日々のルーティンに取り込まれている大切な金銭を得るための動きである。同時に、ごみ箱や路上に落ちている有価物と思われるものを集め、何かお金にならないか、無理ならせめて遊び道具にならないかなどを思案することも、一人ではなく皆でなすことによって様々にアイディアを考えることができ、より新しい発想を生む可能性の幅が広がる。物乞いも同様で、どこで、どんな人に声をかけたらよりお金が得やすいのかといったノウハウが広がり受け継がれる。

さらに、現金獲得の手段としてトンチンと呼ばれる庶民金融がある。路上生活者が行っていたものは回転式貯蓄信用講と呼ばれるもので、特に発展途上国と呼ばれる国と地域においてしばしば見られる。筆者が実際に観察したものは以下のような形で行われた。2 週間から 3 週間に一度 8 名の同じメンバーが集まり、各自に番号を振る。各自が 500FCFA を手元に支払う。さいころを転がし、出た番号の人が手元にあるお金計 4,000FCFA を得るのである。こうして得られたお金は、何か仕事を始めるときの最初の資金や、少し高い靴や洋服を買うために使用される。

以上見てきたように、人々の互助はとりわけお金の獲得という観点からみると色々な場面で行われる。ともに仕事を探したり、仕事をしたり、仕事を紹介したり、トンチンを行ったりと、そのあり方は多様である。こうしたいわゆる所得の向上のための互助のみならず、生活のあらゆる側面において、互助があることを以下でさらに詳しく述べていく。

3.1.2 衣／食／住

「なんでこんなに火を強くしたんだ！せっかくの魚が一瞬で丸焦げ、しかも中身はまだ半生じゃないか！」珍しい光景を目にするところからその日の筆者の町歩きは始まった。カメルーンでは皆料理がとても得意である。路上生活者でも勿論それは変わらない。しかしここでは大きめの魚 2 匹の調理をめぐって言い争いが起こっていた。どうやら年長者が年下に料理を任せていたところ、彼がちょっとよそ見をした隙に魚が大変なことになってしまったようである。味付けの仕方などまで先輩が丁寧に見本を見せている。先輩とは、年齢が上であったり、より長く路上で生活したりしている人を指す。ここでは 23 歳の先輩が調理方法を説明していた。

食事の仕方は多様である。食事をともにする場合、多くの場合それはポイント毎でなされる。最も理想とされるのは、ポイント毎に皆でお金を出し合い、調理して一緒に食べるやり方である。それが最もおいしく栄養もある。お金の出し方にも工夫がある。例えばそこのポイントのリーダーが 500FCFA、リーダーと一緒にいる年上の人たちで、かつ仕事が安定している者は 500FCFA、他の者は 300FCFA、子供たちは 100FCFA ずつ、といった具合である。お金がないという子供は、次回こそどこかで見つけてきて、出すように指示を受ける。お金を出していないからと言って、そこでは食べることができないというわけではない。こうした皆で作って食べることが食事の仕方としては理想的なのだが、なかなかできるものではない。ポイントによるが多くても月に 2〜4 回程である。いずれにせよ一緒に皆で食べるというのは大事にされており、例えば調査に協力してくれた路上生活者が暮らすあるポイントでお米をプレゼントしたことがあったが、その時は仲の良い人たちが多い別なポイントの人々も呼んで皆で食事をとっていた。

他の方法として、バー[6]や露店を何軒か回り、そこで客が食べた食事の余りを小さなビニル袋に入れ集め、ポイントに持ち帰ることもある(写真2参照)。そしてそれをみんなで食べる。露店によっては、こうした食事の余りが出る度に皿によそっておいて、路上生活者が食べ物を探しに来たらそれを渡したり、サービスで1品増やしたりすることもある。

さらに露店の人が、路上生活者が暮らすところに出向き、余った食事を夕方から夜にかけて100FCFAから200FCFAで安く売ることもある。他にもごみ収集の箱から、フルーツや野菜、魚などの調理の残骸となった骨や皮をかごに入れ集め、全てしっかりと焼き食べることもある。町で売られている食べ物も比較的安価なため、しばしば利用される。例えば朝食として食べられるベニエは1個25FCFAくらい、昼食も一般には300FCFAくらいから食べることができる。もし手元にお金があれば、こうした食事も行われる。

このように食事においても互助行為は顕著に見出される。一人で食事を確保するよりも、その時々でお金を持つものや食事を何らかの形で多く得ることができたものを中心として、皆で食べる。こうした行為は当たり前のようになされており、食事の確保に関するリスクは大幅に削減される。なぜなら毎日の食事は一人ひとりにとって死活問題であり、そこではお互いが確実に食事を毎日得られる状況を作る必要があるためである。一人でいる場合、もし当人が病気になったり、どれだけ探しても食事を見つけることができなかったりすれば、彼は食事を全く口にすることができなくなる。互助はこうしたリスクを防ぐ。また月に数回皆でお金を出し合って行われる食事では栄養のバランスを考慮しており、より楽しく栄養のある食事を得ることができるのである。

同様に衣類や寝床の確保にも互助は見られる。衣服は毎日同じ服を着ている人もいれば、年上のおしゃれが好きな人に多いが、しばしば色々な服を着ている人もいる。服や体を洗う場所は大体決まっており、そこは皆で共同で使われる。図4の地図にあるように、いくつかの小川のようなところがあり、そこには排水が流れているのだが、そこで服や体を洗っている(写真1参照)。前項の冒頭で述べた彼もそうである。そのほか、カトリックにより建設されたストリートチルドレンのための支援施設であるエディマ社会センター(Centre Sociale Edimar)にあるシャワーを使うことも可能である。ここでは平日9時から17時まで、シャワー、及び石鹸の無料貸し出しが行われ、また施設内にある卓球台、サッカーボールの利用ができる。

夜寝る場所は空きビルの外にある階段、ビルの谷間の空き地、車道、スーパーマーケットの前の駐車場、広めの歩道、大きな木の下などがある。ヤウンデ市は夜間の気温が日中と比べるとかなり低く、また雨季になると毎日のように雨が降るため、雨をしのぐ場所を探す必要がある。空き地に簡易的な「家」を作ることもある。比較的しっかりした木の棒を支柱として、その周りにダンボールとナイロンを張ったもので、中にはベッドのマット

[6] バーとは高級感のあるカクテルやウイスキーなどを提供する、静かなところではない。大音量でテレビを見たり友人たちとおしゃべりをしたりしながらビールやジュースを飲む大人たちの憩いの場である。

レスを置くこともある。体を小さくしてベッドに3人、地面に3人の計6人ほどが中で寝ることができる構造となっている。雨が降ると天井に水がたまるため、ナイロンやダンボールは頻繁に取り替える必要がある。夜寝る場所をともにすることは、一人で寝るよりもリスクが少ない。一人で寝ていた場合、犯罪や暴力沙汰に巻き込まれたり、警察や憲兵に取り調べを受けたりした場合どうすることもできず、ただ持ち物をすべて取られてしまう。荷物の管理も、後述するが盗難はしばしばあるものの、共同で管理することができる。

3.1.3 ドラッグ／健康

「ちょうだいよ～お願いだよ～。」「だめだめ！はい向こう行って～。」「イヤだ～お願い～！」「だめだよ～！」

有機溶剤[7]の吸引がとりわけ好きなS(10歳・男性)が、年上の何人かに有機溶剤を分けてくれるよう懇願している。周囲の人々はそれを半分笑いながらも阻止しようとする。こうしたやり取りが十数分続いた後、先輩たちは彼に有機溶剤を与え、彼はそれを満足そうに吸っていた。Sの粘り勝ちであった。

有機溶剤は、特に若い子供(10代前半)を中心に盛んに吸われている。ほとんどの場合靴の補正などのための強力な接着剤を使い、ビニル袋にそれを入れ、その蒸気を吸引するタイプのものである。靴の補正を実際に仕事にしている人がいることもあり、接着剤は手軽に手に入る。上述したように依存性が強く、30歳代の人でも吸っている時がある。

またマリファナも広く使用されている。有機溶剤は年齢の低い子供を中心に使用しているのに対し、マリファナは主に10代後半から大人を中心に使用されている。摂取方法は、紙に巻きつけたものに点火して吸う方法である。マリファナが直接の原因かどうかは不明だが、マリファナを特に多く摂取する人だと、ある日突然筆者のことを忘れている、前日は叫ぶように会話していたのに、次の日にはほとんど喋ろうともしない、人が通るたびにかなり怯えている、などの変化が見られる[8]。マリファナは安価で取引されており、1本約100FCFA である。マリファナはカメルーンでも違法ドラッグの一つとしてその所持、使用が法律で禁止されているが、闇市場[9]から多量に路上生活者の手に渡っている。これは違法

---

[7] 有機溶剤には急性効果(吸ってすぐに現れる症状)と慢性効果(長期に吸っていると現れる症状)がある。急性効果としては吸引するとすぐに有機溶剤の中枢神経に働きかける作用から酩酊から麻酔に至る意識レベルの低下があり、発揚的、多幸的、刺激的な酔いを感じたり、のどの渇きや空腹を忘れたりすることができる。一方で知覚異常(形、色、明るさの変化など)や幻覚の作用がある。また長期的には、精神的障害としていらいらして落ち着かない状態になったり、逆に無気力でだらしがない状態になったりする。通常これらの症状が混在して見られる。一方身体的障害は多彩であるとされ、慢性気管支炎(咳や痰)、抹消神経炎(手足のしびれ、歩行困難、筋肉萎縮)、視神経萎縮(複視、視力低下)、再生不良性貧血(めまい、息切れ)、肝障害(肝機能障害)、脳の萎縮(脳波異常、痴呆)などがあるとされる（財団法人　麻薬・覚せい剤乱用防止センター2009)。

[8] 筆者は医療従事者ではないため、原因といえるかどうかは分からないが、こうした症状が特に有機溶剤、マリファナを多く吸っているものに見られたため、少なくとも関連性はあると考えられる。

[9] 非合法な品々を取引する市場を指す。闇市場の取引にかかわりを持つ人に話を聞いたが、闇市場ではマリファナのみならず様々な薬物や銃器なども取引され、そうした取引に路上生活者が関与することもある

ドラッグのため町の中で堂々と吸うことはできず、吸う場所はいくつかのポイントに限られている。

また出回っているわけではなく一部の人しか持たないが、睡眠薬(もしくは精神安定剤)とされるジアゼパム[10]がある。これもマリファナ同様大変安価で入手できるものとされ、10ミリグラム約100FCFAで購入できる。気持ちよく眠りたい時に使うとのことであった。その他、酒、タバコは年代を問わず利用する。酒はウイスキーが多い。ビニル袋に入った安いウイスキーがあり、子供も大人もそれをよく飲んでいる。

こうしたドラッグや酒、タバコの使用で健康上のリスクは高まっている。互助はこうしたところでもやはり存在し、上述した酒やたばこ、マリファナや有機溶剤は共有されている。しかしここで見逃せないのは、本項の冒頭で述べた、有機溶剤の吸い過ぎを年長者が止めようとしている動きである。「有機溶剤は体に悪い。ほしいと繰り返し言われても、できる限り、あげないようにしなければならない」と述べたのは、有機溶剤をねだる子供を前に筆者にと会話をする3名の路上生活者で、いずも20代前半の人たちである。彼らも有機溶剤を稀に吸うし、以前はもっと吸っていたが、大人になるにつれて徐々にやめていった。有機溶剤の吸い過ぎが体に悪いことを年下の人々に諭す一方で、子供たちは、「大人は有機溶剤を一人占めして、自分たちには分けてくれない」と嘆く。ここで有機溶剤を「体に悪いもの」として認識している理由は、いくつか考えられる。そもそもこうしたドラッグや酒、タバコが共有されているのは、「辛い日々を忘れるため」「お腹が空くのを分からなくするため」であるとされる。一方で、こうしたドラッグを使用し過ぎることで体に悪影響を及ぼしている人も稀に存在する。「有機溶剤をやっているような子供がいたら俺が殴ってやる」といった少し乱暴な言葉遣いが多いある男は、有機溶剤を常日頃から使うかなりの中毒者で、周囲からもあまり強く彼に文句を言ったり、関わったらすぐに喧嘩になりかねないとして少し遠ざけられたりしていた。こうしたことから、行き過ぎたドラッグの使用が当人にとって好ましくない状況になったり、周囲との関係性に多大な影響を与える可能性があったりするために、「体に悪い」という認識がなされていると考えられる。

ドラッグの乱用を食い止めようとしたり、ドラッグを奪ったりすることは、後述する争いの中にも見られる。ただしここで着目したいのは、大人が子供に教育をするように子供のドラッグの乱用を防ごうとしている点である。即ち、路上生活者同士のドラッグや酒、タバコの互助の中で、お互いそれらを求めてしまうことへの理解があり、そのためにそれらをともに利用する一方で、行き過ぎた利用は上述した当人と周囲への悪影響が心配されるため、それを防ぐ努力がされているのである。

ドラッグによる健康に関するリスクに加えて、それらがなくとも、お腹が痛いと言いな

と述べていた。

[10] これは日本でも取り扱われているもので、神経症による不安・緊張・抑うつ、高血圧、易疲労性や睡眠障害などの症状の改善の効果があるとされる。方で副作用として薬物依存になりやすく、けいれん発作、せん妄、ふるえ、不眠、不安、幻覚、妄想などの禁断症状が現れる。

がらうずくまって日陰で横になる人、痛々しい外傷を見せてきてどうにかしてほしいと訴える人は多い。健康に関するリスクは彼らの生活で最も重大な問題の一つであろう。薬局は市内の至るところにあるのだが、薬の値段は安くはなく、買うことはまず不可能である。一方、小規模自営業の一つでインフォーマルに薬を売っている店が路上ではいくつもあり、そこでは薬局よりも安く様々な薬が揃えている。しかしそれらの多くは薬ではない偽物である[11]。病気やけがをした人の周りにいるものは、傍にいてあげたり、食べ物を持ってきて分け与えたりする。お金があればそこで薬を購入し、より栄養があると考えられるものを与える。これ以上の術がないのが現状だが、同じ路上で暮らす人々が健康被害で苦しむ人に何かしてあげたいと思い助けようとすることは、心理的な安心感を生むと考えられ、一人でいるときよりも被害を最小限にとどめることができる。

3.1.4 警察・憲兵との対峙

「持っているのだろ、ほら、かばん出せ。」
「・・・。」
バシッ！(平手で顔面を殴る)
「もう1回聞くぞ、かばん出せ。」
「・・・」
バシッ！(再び平手で顔面を殴る)
「お前(筆者)は誰だ。お前の荷物も全部出せ。」
(かばんを差し出す。パスポートなど調べられる。大麻を持っていないことを確認)
「ほら、帰れ、二度と来るな。」

ポイントによっては路上生活者が暮らしていることが全く一般の人には知られていない場所もある[12]。そうしたところではマリファナを持つ人が多い。そこに目をつけて警察や憲兵が取り締まりに訪れることがある。

あるポイントで路上生活者5名と会話をしていた時、憲兵3名が現れた。マリファナなどの違法薬物などを所持していないか調べるためだという。かばんを出すように促す憲兵に、わずかでも躊躇う態度を示したり、言い訳をしようとしたりするとすぐに路上生活者は殴られていた。筆者もマリファナ所持を疑われ、一通り調べられたところで解放された。後日聞いた話によると、かばんの中には現金が多く入っていて、もし渡してしまうとその

[11] 本当に偽物かどうかの薬品の確認までは行っていない。路上で実際に薬を売る人、薬局店で働く職員、及びNGO関係者からこうした情報を得た。
[12] 路上生活者の生活場所、とりわけ寝床については、多くの場合かなり分かりにくく、同じ都市の人々でもおそらくほとんど皆が知らない場所も多数ある。路上生活者はこうした場所に住むことが彼ら自身の安全のためだとしている。しかし筆者の印象や調査協力者の話では、都市の人々にとっては、どこで暮らしているのか分からないマイナスの印象を与え、かえって路上生活者の犯罪者呼ばわりする原因を作る要素になりかねないとも捉えられた。

お金を全部盗られてしまうのだという。また彼らはマリファナを持っていなかったが、もし持っていた場合、手続き上は事務所に連れて行かれ取調べを受けることとなる。しかし多くの場合賄賂を渡すことでその場を見逃してもらうことができ、また警察や憲兵も最初からそれが目的であることがほとんどである。こうした取り締まりの際は、警察や憲兵は身体的にも社会的地位も彼らよりはるかに上であり、彼らはそれを利用する。当然、訓練を受けている警察や憲兵を相手に、暴力での解決を図るのは極めて難しい。そのため彼らは取り締まりを受け入れ、お金と交渉でその場を乗り越える必要がある。違法ドラッグを持っていようといまいと、彼らはこうしたハラスメントというリスクを抱えている。

こうしたリスクに対処するため、警察、憲兵の取り締まりがどこで、いつあったのか、もしくはこれからあるのかという情報があれば、路上生活者の間で口伝えにすぐに共有される。またこうした事態に備えて、予め皆でお金を出し合い、賄賂用のお金をある程度準備しておくこともある。これによって手持ちのお金を全て盗られたり、執拗以上に物品を取り上げられたりすることを防ぐことができる。先にも述べたが、こうしたリスクは寝床をともにし、お金の準備や荷物の管理を行うことで、ある程度緩和することができる。

一方で警察・憲兵との関係性が良好に構築されていることもある。ポイントの一つである、先にも述べたカラファタはその良い例である。カラファタの裏には警察署があるのだが、警察がここを取り締まりに来ることは全くと言っていいほどない。パトロールに訪れることはしばしばだが、路上生活者の生活を妨害するようなことはない。言わば警察公認の状態である。推測の域を出ないがこれにはいくつかの理由が考えられる。例えばカラファタには子供の数がとりわけ多く、「ストリートチルドレン問題」を扱う社会問題省がここでの調査をしばしば行うため、迂闊に手を出せないのではないかという点が考えられる[13]。また、カラファタは町の中心部にかなりの路上生活者が暮らす場所で、しかも路上生活者が暮らすポイントとしてはかなり珍しいことに人の目にさらされている。町の人も路上生活者が暮らす場所といえばカラファタ、と言うくらいカラファタを認知している。路上生活者の町の人の印象は、罪を犯す危険な印象がある一方で、かわいそうといった同情的な意見があるのは、とりわけここの路上生活者を指している。従って激しい取り締まりを行うと町の人々の反感を買うことに繋がりかねない。

以上、路上生活者の互助を述べてきた。繰り返すが特筆すべきは、路上生活者の互助行為は特別に規模の大きいものではなく、日常生活の様々な場面の中で行われ、それは時に無意識的に行われている点である。このように日々の生活に埋め込まれた互助行為は日々の生活のリスクや困難への取り組みであり、より良い生活を求めるため、あるいは自分が持ち合わせていない物事の補完や機会を増やすための取り組みである。

---

[13] 行政にとって路上生活者の存在は「社会問題」であり、ここでは「ストリートチルドレン(Les enfants de la rue)問題」として認識される。現在は社会問題省(Ministère des Affaires Sociales)がそれを担当している。

3.2　路上生活者同士の争い

3.2.1　不平等な配分、盗難、暴力

路上生活者同士に見られる小さないさかい、言い争い、暴力、相手を否定するような態度などの全てを含めてここでは争いと呼ぶ。第1節では互助行為が日常生活のさまざまな場面で行われていることを描いたが、続く本節では、路上生活者同士の争いを描いていく。争いもまた日常生活の至る所で目にすることができる。

第1項では、表立って現れる日常生活の争いはどのようなものかを示す。第2項では、一見争いになりそうだが実はならないAという人物をめぐる人々の不満・不平について述べる。第2項で述べる争いにならないという事例は、第4章で争いが起こる条件とその役割について検討する上で重要となる。

路上生活者の間での争いは多くあるが、それらは決して特徴的な大きな争いがあるわけではない。争いは互助と同様に、生活のいたるところで見かけるもので、細かいいさかいのようなものや、自分達の主張のぶつかり合いのようなものである。ただしそうした争いは、頻発している点は注目に値する。

例えば第1節でも言及した食事の分配に関して、それを毎回公平に行うことは現実ではなかなか難しい。例え誰かがフルーツやお菓子、または1食分の食事を得たとしても、そのほとんどを年上の人々が食べてしまい、いくらお願いしても年下の子供たちには分け与えられないといったことはしばしば見られる。あまりに分配が不平等であったり、それが毎回であったりした場合、掴み合いや殴り合いになることもある。カラファタにおいて筆者が見た例は、露店の人が2名ほど、路上生活者のために食事を1杯200FCFAで配っていた時のことであった。その時200FCFAを持っていたものはそれを食べることができるが、それができないものは、お金を持っていたり食べ物を食べていたりするものにそれをねだるしかなかった。人によってはその日ほとんど何も口にしていない場合もあったため、食べ物を得たものへの周囲の人々の不満はかなり大きく、激し言い争いや、場合によっては複数の人々で一気に皿の食べ物を無理やりつかみ奪っていた。こうした争いはポイント毎にその姿がいくらか異なる。子供が多い場合、年上の人々は子供たちにものをあげるのを渋る傾向がある。それは「あげだしたら、きりがない」ためであると言う。確かに本当にあげだしていてはきりがないほど、子供の人数がたくさんいる場合もあり、平等性や自分の分を確保しつつ分け合いを行うことはなかなか難しい様子であった。一方子供たちの主張を聞いてみると、「大人たちが一人占めしてしまって大変なんだよ」と言う。まるで兄弟喧嘩のようなこうした争いが日々営まれる。ここでは人々は我慢することなく、食べ物を

見つけたら我先にと飛び掛るし、誰かが自分のものだと主張したら、それは違うと激しく言い争う。

仕事においてもそれは同様で、例えばカラファタや他のいくつかのポイントでは路上生活者が駐車の誘導を行うことがある。それを複数名で行った後、運転手からお金を得ると、その分配をめぐって言い争いが起こる。同様に物乞いをしていて一人の人から複数名に対してお金が渡された場合、そこではしばしば喧嘩が行われる。人が集まって仕事を行っている場合、こうしたお金をめぐる争いは後を絶たない。日々収入が異なり、仕事の内容も場合により様々であるために規範やルール作りが難しく、そのためこうした争いを通してのお金の分配にならざるを得ない点は指摘できる。

盗難もある。持ち物の管理は難しく、屋根の上などに置いてどうにか簡単には盗られないようにするのだが、それでも無くなる。それが路上生活者同士によるものかどうか判断がつきにくい時も勿論ある。第1節第2項でHが筆者にバトンを作ってくれたという事例を紹介したが、実はHはバトンを筆者のために作った後、筆者に渡す前に一度盗難に遭っている。

さらに、ドラッグやウイスキー、タバコに関しての争いもある。第1節で指摘したように、Sが有機溶剤を使用することを望んでも、相手がそれを譲ってくれない場合、しばしば言い争いが起こっていた。とりわけドラッグを吸い過ぎている人とのやり取りは争いを生みやすい。お互いにすぐに争いにつながりやすいようないらいらした精神状態であったり、周囲も争いでしか人々を止めることができないと理解していたりするため、ドラッグを巡る争いは日々行われている。

他にも、次項で述べるAやIといった路上生活者の代表者たちへの評価や考えについて、誰をどのように評価するか、彼の判断は正しかったのか間違っていたのかが激しく言い争われる。

ただし争いを抑制するものとして、カメルーンで人々が意識する妬みがある。妬みが膨らんでそれが呪いに発展することもあり、実に危険である[14]。従って、例えば争った結果、利益が自分に全くなく相手が利益を得るということが長く続くことは危険である。妬みの

[14] 例えばゲシーレはカメルーン東部のマカ社会における呪術を調査した。マカ社会では元来、血縁関係の中に強い互酬と分配の義務があり、平等性指向が強い。しかし同時に身分やヒエラルキーが無く、個人の達成志向も強い。したがってこの平等性と個人の達成志向の矛盾があり、そこで妖術が生まれる。つまり多くの富を得ている血縁関係にある人物を妖術で殺し、相手の権力の獲得と富の蓄積を可能にするのである。こうして富の平準化が起こる。また、妖術で得た富と権力は他の妖術を持つもの同士で分け与え合う。したがってマカ社会において成功したビジネスマンや政治家は妖術を使う人物として見られている。一方でそれは他の人物に妖術で殺される可能性を持つことを意味し、彼らの富と財力は不確実なものとなる。こうした妖術を防ぐために、近年、特に都市において成功したものは、その財力によって強力な護符を身に付けたり、呪医の助力を得たりすることで、個人の利益追求を行っていく。
これはカメルーンの多くの地域で見られ、妖術はもはや富の分配のために働くのではなく、人びとが呪術によって権力と富を獲得しているとされている。さらに近年ではこうした伝統的な呪術だけではなく、新しい呪術も生まれている。富を持つ人物が若者や自分の血縁関係者を殺し、ゾンビとして働かせるというのである。これはカメルーンの都市ドゥアラから、南西部州にまで広く存在する。ゲシーレはこの背景として資本主義社会において富める者がさらに富と地位を得る一方で、貧しい者が厳しい生活を強いられる、という格差の拡大を説明するためになされると分析している(Geschiere1997)。

蓄積である。それを抑制するために、妬みが膨らんでいる人物への次回からの財の分配は必ず行うべきであるとされるようになる。こうした観点から考えると、争いというのは、自分が利益をずっと受けていないということを、周囲に主張することができるものとしても理解できる。この点は第4章で詳述する。

3.2.2 Aへの不満

争いが一見起こりそうだが、それは表面化されず、ある人物への不満を心の中で多くの人が思っている状態になることがある。そうした例をAと呼ばれる人物への周囲の路上生活者の不満がどのように形成されているのかを事例として以下では述べていく。A への不満は表立ってAに向けて発せられることはほとんどない。前項では争いが活発になされている点を示したが、一方でAに対してはなぜそうした争いが起こらないのか、この点を検討するために、本項では、行政と路上生活者とのやり取りの中から生まれた路上生活者の代表者としてのIとAについてまず述べていく。

2005 年、ヤウンデ市都市コミュニティ局(Communité Urbaine à Yaoundé)がストリートチルドレンへの支援、即ち就職先の斡旋と、行政が働いている人々への生活費の補助を行うことが決定された。この時行政との交渉のために路上生活者から代表者が選ばれた。それがIとAであった。Iは31歳でヤウンデ市生まれ、Aは自称31歳(ナショナルIDカードによると26歳)でガウンデレ生まれであり、彼らの話によると、二人とも他の路上生活者から、代表にふさわしいと推薦を受けたために代表者になった。この時の行政からの支援について複数の路上生活者によれば、仕事の斡旋は仕事自体が無いために行われず、また支援のためのお金のほとんどは行政の担当者たちの懐に入っていったという。その後2008年3月19日にストリートチルドレン問題に関する会議が社会問題省主催で行われた。そこでは複数の行政機関とストリートチルドレンの代表者であるIとAを初めとする複数の路上生活者が参加して行われた。この会議で「ストリートチルドレン問題」がカメルーン各都市にある深刻な社会問題の一つであることが認識され、各省庁機関が協力してそれに対処することが決定された(Ministère des Affaires Sociales2008)。その後、現在(2009年9月)に至るまでストリートチルドレンに関する実態調査が行われているとともに、いくつかの支援が実行された。第1回目の支援としてヤウンデ市、ドゥアラ市のストリートチルドレンの内、119 人が家族の元に帰された(African Commission on Human and People's Rights 2010、及びMinistère des Affaires Sociales で働く、ストリートチルドレン担当の職員の一人へのインタビュー)。こうした行政からの話し合いと支援がなされる中で、ストリートチルドレン側が中心となって、ストリートチルドレン組織(L'Association des Enfants de la rue)が作られた[15]。この組織がなぜどのようなプロセスでできたのかは未

[15] ここで述べられている組織とは、l'Association をさす。カメルーンでは、市民社会組織には「組織」と非政府組織(ONG)がある。「組織」を設立するには、メンバー表、事務所、会計報告などを行政に示すこ

確認であるが、この時の行政側とのやり取りの中でできたもので、行政側との話し合いのため以外に何か特別なことを組織として行っているわけではない。この時の組織の代表者がIであり、その代理人がAであった。このようにIとAはストリートチルドレンへの行政による支援のプロセスの中で代表者となった。彼らはただ行政と交渉を行うのみならず、周囲の路上生活者の生活環境の改善に向けて、代表者として活動を試みていた。その具体的活動内容は後で述べるが、ここで指摘したいのは、代表者が2名いる状況がいくつかの齟齬をきたし始めた点である。特に2008年の時点でAが代理人、Iが代表者となったのだから、Aはある程度身を引くべきポジションであった。しかしAは、2005年の支援の際に彼が代表者の一人として選ばれて以来ずっと、周囲の路上生活者、特に言うことを聞かせやすい子供たちに対して、自分のことを代表者として扱うように強要した。Aがヤウンデ市で路上生活を始めたのは彼が11歳の時、即ち20年前であり、先輩の彼に逆らうことは周囲の、とりわけ年下の人々には困難であった。一方で彼は確かに代表者としてふさわしいであろう様々な行動、例えば相談所を作り人々の悩みを聞いたり、お金の管理をしたり、見回りをしたり、行政や警察・憲兵とのやり取りには率先して参加したりした。Iもまた代表者として同様の活動を行い、周囲から信頼を得ていた。

さて、Iは今もある程度の信頼を得ているのに対して、Aは周囲から不信感を抱かれている。なぜ人々はAに不信感を抱くのか、特に彼らの人間関係と、なかなか表面化しない人々のAへの不満に着目しながら、路上生活者の中にある、静かで複雑な不信や不満を以下で見ていく。調査はAと話をしながら色々なポイントを歩き、またAがいないときにAの不満を筆者が他の路上生活者から聞いたことを元に検討する。

彼が不信感を抱かれる理由として、例えば周囲の人々に無理に代表者と認識するように強制したり、自分が代表だと大々的に言ったりすることが要因の一つになっていると考えられる。筆者がAのいる場所を訪ねた時も、自分がヤウンデ市中の路上生活者の代表であり、皆自分を信頼していることを何度もアピールしていた。こうしたふてぶてしい態度や頑固な態度、自分が一番だと威張っている雰囲気が嫌いだと述べる人もいた。

加えて彼が、正しいことであり良かれと思い行っていることが支持されていない時がある。例えばある人が路上で壊れた自転車が放置されているものを見つけた時のことである。前節で述べたとおり、こうしたものは修理することができれば、それを売ってお金を得られるかもしれないと、皆は考える。特に自転車は修理することができればかなり儲かるか

とにより、基本的には誰でも設立することができる。その後その予算や人的な規模が拡大した際に申請を行うことで、非政府組織と名乗ることができる。しかし複数の組織及び非政府組織の人々から聞いた話では、実際に非政府組織となるには、大金を行政側に渡し、また極めて強い親類もしくは仕事上の関係を行政側の人物と持っていない限り不可能に近いと言う。非政府組織になると、行政からの支援により、例えば空港からタクシーを無料で使えたり、政府から補助金を得る事ができたりと、多くの援助を受けることができる。従って「非政府」であるはずの非政府組織は、政府と強力に繋がっていることになる。事例として、筆者が出会ったある非政府組織Cの代表者は、以前社会福祉省で働いており、その上層部の人間と顔なじみであったために、「様々なコネクションを使って、たまたま非政府組織になることができた」のだと述べていた。

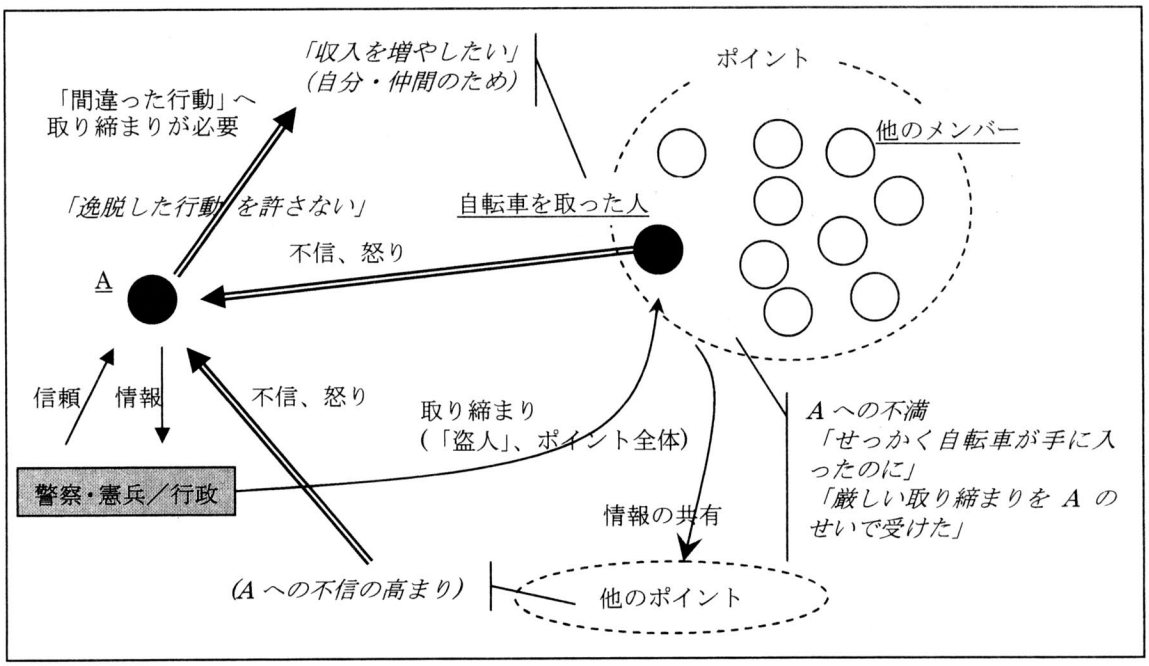

図 5 自転車盗難疑惑に関するアクターの関係図（筆者作成）

もしれない。しかしそれは捨てられたものなのか、置いてあるだけなのかが少し判断しにくかった。考えた挙句、彼はそれを持ち帰り修理して売ることにした。それを見たAは、これを盗難と捉え、警察に通報したのであった。自転車を持って帰った路上生活者は、逮捕はされなかったものの、警察から厳しい取り調べを受けた。自転車を持ち帰った彼やその周囲は、なぜ同じ路上生活者の仲間を警察に突き出すようなことをするのだと、A を激しく非難した。路上生活者の話では、A曰く、「路上生活者が犯罪者であるというイメージを払拭したいという思いが強くあり、こうした盗難という「逸脱した」行為をする路上生活者は許さない、そのために通報したのだ」とのことであった(図 5 参照)。確かに町の人々が持つ路上生活者への悪い印象はある[16]。路上生活者の代表者として、これ以上路上生活者の悪い印象を作らないようにしなければならないとAが考えることは理に叶っているといえるかもしれない。つまり、路上生活者へのスティグマを払拭するためには、犯罪を減らしていかなくてはいけないのである。また、こうした警察への通報は、警察、あるいは行政からAへの絶対的な信頼を生むことになる。この点はAと話す中で彼が認めていることでもある。つまり警察や憲兵、さらに行政からの信頼を得ると、何かの交渉ごとがあるたびにAを頼るようになる。その結果、周囲の路上生活者にとっては、信頼されているAに警察らとの話し合い——マリファナの所持と賄賂に関する問題から、行政から路上生活者への支援、NGO による支援、筆者のような外部者の介入——を任せるしかないことにな

[16] ヤウンデ市における路上生活者の多くが引っ手繰りや強盗、暴力などを平気でふるう危険な人々という印象を持たれていると言ってよい。そのため複数の路上生活者によれば、タクシーの乗車拒否をされたり、警察や憲兵から理由も無く取調べをうけ、賄賂を要求されたりすることがあるという。一方、先に述べたように路上生活を家族の問題を抱えたかわいそうな人々、あるいは仕事を探す努力を放棄した怠惰な人々と考える人々もいた。

る。Aとしては代表者としての権限と威厳を強められる。

では、そもそもなぜAは代表者としての地位をこんなにも確立したいのか。Aの説明や筆者の見解では、路上生活者が少しでも良いイメージの下で生活を送れるようにしたいとか、生活の中での様々なリスクを軽減したいとか、あるいは彼の支配欲を満たすためとか、色々な説明が可能であろう。一方で周囲の人々による説明はいささか冷たい。確かにAを信頼する人は、彼の行動にしばしば感謝するという。例えばもし路上生活者が罪を犯し逃亡した疑いがあると、警察や憲兵はまずAを訪ね、彼が匿っていないか調べたり、執拗に彼への尋問を行ったりする。つまりこうした警察や憲兵の尋問は基本的にAに行われるため、他の人々に危害が加わることが少なくなるのである。さらに彼は仕事をしていて、家もあるため[17]、例えば病気や怪我で苦しい状況にあったら、彼に頼ることができる。こうした点に関して彼は支持されており、しかもそれらは他の人にはなかなかできることではない。更に彼自身は20年間路上で生活し続けており経験が豊富であり、彼を頼ってアドバイスを求めると、その経験を生かした的確な答えが返ってくるのである 。

しかし路上生活者の大多数は、A は裏でお金や物品を独り占めするために代表者であり続けたいのだという。これは子供から大人まで幅広く聞かれた声である。筆者が夜中にAと各ポイントを転々と回っていた時のことである。Aがどこかに行ったすきに10歳代後半と思われる路上生活者の一人がこう述べた。「これ以上あの男(A)と話し続けるのは危険だ。何をされるか、盗られるか分からない。周りからも冷たい目で見られる。」別の日にも、Aのいない場所で何名かの路上生活者に同じ警告を受けた。「Aは路上生活者から皆で食べるためといってお金を集め、それを自分だけの食事や生活のために使っている悪者だ」「行政からのお金が消えたことがあった。彼が全部盗んでしまったのだよ。」こうした語りは多い。

しかしこうした不満を本人に直接ぶつけることはなかなか困難であるという。そこには多くの力が働いている。一つには彼が行政や警察・憲兵にある程度信頼されており、極端な話をすれば彼の一言で自分が監獄行きになりかねないためである。また彼の代表者としての権威が強く彼への支持もあり、そうした人々からの反感も大きな問題である。さらに彼はほとんどの路上生活者の、いわば先輩である。そうした先輩へはいくらかの配慮と発言を受け入れることが、路上生活者同士の暗黙のルールである。こうした観点からも、A本人へ不満をぶつけることができなくなる。

以上のようなAとAを取り巻く環境が、一見代表者を据えて助け合っているように見える路上生活者の内部に潜む、Aへの不満である。人々はA自身に直接その不満をぶつけることが難しく、また彼のお陰で生活が確かに改善される可能性を持つという、自分自身もある程度彼のお陰で利益を得ている。その結果、こうした不満は一部の仲間内でささやくことしかできないのである。一方A自身は代表者としての権威を得る一方で、時に厳しい

[17] Aは家具作りのノウハウを持ち、それを仕事にすることができている。自宅の家具は自分が作ったものだと自慢しながら、様々な家具を見せてくれた。彼は家を持つがほとんど毎日路上生活者が暮らす場所に足を運び、路上生活者とともに過ごす。

取り締まりをする警察や憲兵と対峙しなければならない。第4章で述べるが、彼は筆者が日本にいる間に逮捕され、そしてまた釈放された。この逮捕劇が彼への信頼を著しく低下させる決定的要因となった。

一方、Iはこうした不信を特に受けていない。もともと彼は家もあり路上に頻繁に顔を出すわけではない。たまに路上に顔を出しては、皆の世話をして知らぬ間に帰っていく。筆者自身もIを見つけるのには苦労するほどで、Aに比べると会って話した回数は格段に少ない。そのため信頼は得ているものの、路上生活者との深いかかわりがあるわけでもない。またAとの関係は良くも悪くもなく、会っても顔を合わす程度である。筆者が相手のことをどう考えているのか聞くと、お互いが自分こそ代表者だと言い合うだけで、それ以上語ろうとはしない。Iは、Aが皆に嫌われていると述べる一方、Aは、自分が代表者だと皆に呼ばれている点や、Iは大して路上生活者のために活動しないが、自分は多くのことを行っている点を指摘する。従って他の路上生活者から見れば、Iがより良い代表者ではあるものの、彼自身が路上に姿を現すことはそこまで多くない。一方でAはよく路上に顔を出し積極的に活動を行うも、それがしばしば路上生活者の不満を招いてしまっている。

以上、第3章では路上生活者の日常生活に見られる互助と争いに着目した。第1節では互助行為がどのような場面で見られるのかを詳細に論じた。そこで明らかとなったのは、互助行為は決して規模の大きいものではなく、日常生活の何気ないところに埋め込まれ、人々の間でなされている点であった。第2節では互助と同様に日常生活には様々な争いがあることを示した。争いもまた決して規模の大きなものではなく、日々の生活の中での自己主張の一つであった。また争いが起こりにくい人々の関係性があることも示した。争いは必ずしもどのような環境下でもむやみやたらになされるものではない。

次章では、ここで検討した互助と争いはどのような関係性にあり、それらがどのようにして人々の日々の生活実践となっているのかを明らかにする。

第4章 互助の中の争い

はじめに

ここまで見てきたような互助と争いはなぜお互いに矛盾することなく存立するのか、争いが起こらないのはどのような場合か、こうした疑問に答えるのが本章の目的である。第1節では左記の点を明らかにする前段階として、前章でも検討したAの事例を再び取り上げながら、ヤウンデ市の路上生活者の場は人々の出入りが極めて激しく、頻繁に路上から出たり入ったりする人々が多い点ことを示す。続く第2節では、そうした流動的な人々の関係性の中にあるからこそ争いが起こりやすく、一方である程度の秩序を保ち、日々の困難への取り組みとしての互助行為が行われ、互助と争いが矛盾なく存立することを示す。

4.1 流動的な都市

4.1.1 刻々と変わる路上生活者同士の関係性

2009年3月17日から20日にかけて、ローマ法王がカメルーン・ヤウンデ市を訪問した。この出来事は路上生活者に大きな影響を与えた。ローマ法王が訪問するに先立ち、3月2日13時30分[18]、警察によって、路上生活者が暮らすポイントのいくつかで一斉立ち退きが行われ、さらにそこにいる路上生活者が逮捕された。立ち退きが行われたのは一般的に路上生活者が暮らしていると知られていないいくつかのポイントであり、カラファタのような目立つポイントとは逆に、マリファナなどの違法薬物の使用や、犯罪者を匿っているとの印象がもたれやすいポイントもあった。カラファタを初めとする、日頃から路上生活者が暮らすことが比較的広く認知されているポイントではこうした立ち退きは一切なかった。この立ち退きにより、路上生活者が保管していたペットボトルや調理道具は没収され、さらに簡易的に木の枝やビニルで作られた「家」はすべて壊された。2009年9月の調査時点で、彼らが暮らしていた場所には跡形も残っていない[19]。Aの話では、彼らが罪を犯したかどうかに拘わりなく、そのポイントにいたほぼ全員が逮捕され、厳しい取り締まりを受けた。現在でも筆者が知る何名もの路上生活者が何らかの罪に問われ、もしくはAの言う

[18] Aの証言による。彼は絶対に日時を忘れないと言っていた。もし彼の証言が間違っていたとしても、大きな間違いではないと考えられる。また他の路上生活者からも3月頃だったと言う証言はいくつか得られている。

[19] 現在では少し離れた場所で、以前と同様の環境を作ろうとしている。

ように何の罪も犯していないのに、刑務所の中にいる。A も約 4 カ月間刑務所で暮らした後に釈放されている。

このことが、第 3 章でも述べた路上生活者同士の関係性にどのような影響を与えたのであろうか。まずAの代表者としての権威がいくらか損なわれている。彼がいたポイントを中心に全部で数十名の逮捕者が出ており、また彼自身も釈放後は仕事や家を失いリスクの高い生活を強いられている。こうした状況下にあって、A について他の路上生活者は厳しい指摘をしている。「彼は釈放された後、生活がきつくなったからか、持ち前の頑固な態度で他の路上生活者の食べ物や品々を勝手に盗っていく」、「お金を集めて何かをすると言いながら、やっぱり何もせずそのお金を自分のものにしている」など、A への不信が以前にも増して強いものとなっていった。そのせいか、A も無理に路上生活者の代表者として行動しようとはしていないように思えた。もちろん彼が依然先輩として強い権限を行使しようとする態度にさほど変わりはない。

またもう一人の路上生活者の代表者であるＩ氏は姿を消した。彼の行き先については依然不明である。彼のことを記憶している者もかなり少なくなってきている。

このように 2005 年以降、2 人の代表者への信頼と不信に基づいて築かれていた路上生活者の関係性は、今やより単純化されてきた。すなわちＡと彼を嫌う路上生活者、というより単純な関係性である。さらにＡへの語りの中で、先にも述べたような彼の自分勝手な行動への非難は多くあった。こうした行動への非難は、以前はＡが担保していた警察や憲兵、行政との関係性、あるいは彼自身の路上生活者への様々な貢献があったからこそなし得たものであった。しかし現在はそうした貢献はほとんど無くなったにも拘らず、食事やお金、寝床を奪っていくのだと言う。こうした彼の自分勝手な考え方が幾分強まった点も、路上生活者全体の関係性を把握する上で、重要な変化と言える。

4.1.2　来るものは拒まず、去るものは追わず

逮捕者が多く出たという話を上で述べたが、このように何らかの事情で逮捕される路上生活者の例は、ローマ法王訪問の時でなくとも多く聞かれる。ヤウンデＩ地区警察署長の話でも、人数は未公表だが、路上生活者はかなりの人数、罪を犯し逮捕されているという[20]。このように、路上生活の場から姿を消す人々は多い。逮捕される他にも、例えばより良い仕事を求めて他の都市に行く場合もある。第 3 章で言及した、筆者にバトンを作ってくれたＨは、2009 年 9 月の時点で既にヤウンデ市を離れドゥアラ市に行っていた。工芸品が作れるという彼の技術をヤウンデ市では活かすことができないと判断し、自分の技術を生かすためにドゥアラ市で再びそれに関係のある仕事を探そうと試みている。また行政や市民社会組織による支援で、自身の出身地へと帰る人々もいる。その他にも、少し安定的な仕

[20] 筆者インタビューによる。

事を得ることができたり、家族との関係性が改善されたり、仲が良い数名で家を借りて生活をしようと試みる人々もいる。以下で少し特異な事例を示す。

ある路上生活者は5人で路上を出ることを決めた。現在では家を借りて生活をしている。5人のエスニックグループや出身はバミレケ、エウォンド、ドゥアラ、英語圏[21]、北部地方[22]と、極めて多様である。その中の一人である0は、母親がドゥアラ市で働き、父親がヤウンデ大学教授であったため[23]、かつては生活に困らなかった。しかし両親の離婚に加えて0の高校生時代の金遣いの荒さに父親が激怒することが何度もあり、0は家を飛び出し路上で暮らすようになったという。路上で暮らしながらも彼は小さな仕事を探してはお金を貯め、その後家を借りての生活を始めている。さらに昨年度から大学にも行き始めた。お金は母親から借りている。このように路上を出て、家を借りて生活をする契機やその理由は様々で、それはいつでも起こりうる。

こうして路上生活者がヤウンデ市の路上から出ていく一方、路上生活に新たに加わる人々も多くいる。例えば北部の情勢の変化による避難民や、刑務所から釈放された人が路上に来る。刑務所から釈放された人々は、親戚に受け入れてもらえず行き場を失ったり、過去に路上生活をした経験があり、また路上生活に戻ったりする場合もある。他にも家庭の問題はどこの地域にいてもあり、いつ都市に出て、路上生活者となるかは分からない。さらに小規模自営業への行政による取り締まりによって、路上生活者が増加することがある。以下ではその取り締まりについて言及する。

2009年8月中旬、ヤウンデ市の小規模自営業者への大規模な取り締まりが行われた[24]。やり方は単純で、路上で商売をする人々の店や物品を片端からトラックに詰め込み没収するのである。日頃からこうした小規模自営業者への取り締まりは行われており、警察のトラックが来たら素早く品物を片付けて全速力で走って逃げる人々をしばしば見かける。なお、この時の取り締まりは数百人規模の警察と憲兵が動員されたという。特に小規模自営業者が集まる中央市場周辺やアヒジョ広場から露店が消え閑散とした街並みとなり、職を一時的に失った人々が町に溢れた。しかし数日後には商売を再開する人々が現れ始めていた。警察がいつどこに来るか分からないため、取締りに関する情報をできる限り手に入れると同時に、移動しやすいよう軽装備で商売を再開する。筆者の友人も「明日の13時にアヒジョ広場に警察が来る」といった情報を、どこからか得ていた。いたちごっこのような行政と住民の争いは十数年以上まえから続いており、これから先もしばらく続きそうである。こうした行政側の取り締まりが、元々困難な生活を強いられていた人々にとっては、

---

[21] エスニックグループについては回答を拒否した。英語圏からの出身であるとの答えは得たため、北西部州か南西部州の出身となる。

[22] インタビューは3度彼らが暮らす家で行ったが、北部地方出身であるという彼とは出会うことができなかったため、具体的にどこの出身か、情報は得られていない。

[23] 父親は2年前に亡くなっている。

[24] 筆者がヤウンデ市に着いたのは8月22日であり、町を歩いた時には筆者が知る状況とは小規模自営業者が激減した状況であった。以下の内容は実際に取り締まりで被害を受けた人々、及び筆者の調査協力者から得た情報である。

没収を受けた場合に路上での生活を強いられる契機となってしまう。実施に2009年8月の行政の行動がきっかけで、2009年9月頃には路上で寝泊りをする人々は増えてきたと複数の路上生活者が述べている。

このように路上生活者の出入りは激しい。路上はそうした人々に「柔軟」に対応し、来るものも、去る者も拒まない。それはなぜなのか。全く異なる生活環境を背負う人々が集まるにも拘わらず、人々が路上での生活を比較的安定的に保つための仕組みを以下では検討していく。

4.2　互助と争いが交錯する生活実践

4.2.1　言いたいことを言う

流動的で「他人」とも呼べるような間柄の中で、同じ路上で暮らすもの同士が生活する場合、より合理的と考えられるのは、お互いが助け合って暮らすことであることはすぐに気付くことができる。よほどの所得がない限り、都市における「孤独な」生活は難しい。先述したように彼らが血縁を基盤とするような関係性が希薄化したがゆえに、「普通であれば」あるはずの家族や親族、同郷者との助け合いを欠いていることとも関係する。衣食住の確保や仕事を通した現金収入、心理的な安心感に至るまで、行政側が何も手を差し伸べてくれない場合、住民相互の互助行為は、日常生活の中で有効となる。一方、前節で述べたとおり、路上は流動的で、人々は「他者」、すなわち異なるエスニックグループ、出身、宗教などを背景としている人々で構成されている。こうした中で路上生活者は、路上生活を何とかうまくこなしている。ここにはどのような力学が働いているのか。この時重視されるのが、日常生活の中の様々な争いである。争いが起こるのは彼らの関係を壊す方向に導くのではなく、むしろ安定的な方向へと導く。なぜなら、路上生活の場の流動性が高いために、争いは、極端に言えばゼロサム的なその場限りの関係性の中でなされる。そこでは短期的で「他者」同士の関係性であるからこそ、お互いの不信が激しく、その不信を早く取り除き、良好な関係性に向かわせる自己主張のための争いが起こる。こうした良好な関係性へのプロセスが、路上生活者の生活の場を安定的なものへと導くのである。なおここで言う安定しているとは、争いのある日常生活が、当たり前のように人々の中で認識されており、それが共同性の維持に貢献できている状態である。それは路上生活を送る人々の出入りが激しく流動的であることを前提として、互助行為が行われていることが条件の下に成り立つ。まずはこの互助行為について以下で詳述する。

第3章では、路上生活者は日々多くの困難を抱えている一方で、人々は互助行為を通し

てそれに対処している点が明らかとなった。そこで行われている互助行為は決して規模の大きなものではなく、日々の生活で垣間見られる何気ないものが中心であった。こうした互助行為の規模が小さいことは重要であり、それは前節で述べたような個々の成員が多様な生活背景を持っていることが大きな要因の一つである。なぜなら路上生活を送る人々は血縁で結ばれる間柄ではなく、エスニックグループや出身地のほか、今まで経てきた人生経験までもお互いに想像できないくらいに実に多様な人々で構成されているためである。さらに路上生活者はいつその場から別な都市に行くかも分からず、逮捕されるかも分からない。そうした中で互助行為が必要とされる場合、それは一時的で小さなものの積み重ねにならざるを得ない。こうした互助行為がなされていることが人々にとっての生活の中に当たり前に組み込まれている。ただし比較的例外的な互助行為として庶民金融としてのトンチンが挙げられる。トンチンはお互いのある程度の信頼と継続的な参加が求められる。なぜならもし流動的であったり、相手のことを全く信頼していなかったりする場合、お金を得次第すぐに当人がいなくなってしまう可能性があるためである。従って筆者が確認したトンチンを行っているメンバーは途中別な都市や刑務所への出入りはあるものの、1 年以上にわたって路上での生活を続けている仲の良い人々によって行われていた。

こうした一部の例外を除き、互助行為の多くは誰もが簡単に参与でき、かつ誰もが簡単に抜け出すことができる。しかも抜け出したり減ったりしたとしても、路上生活の場に大きな影響はない。例えば食事を分け与えることにしても、多めに食事を得ることができた場合、それを他の人々に分ければよいし、もし自分で得ることができなければ、しばしば他の人々から得ればよい。寝床を共有することも、寝る場所がないほど人が集まったポイントも特には見られなかったし、もし場所がなければ近くの別なポイントに行けばよい。

こうした争いが安定をもたらすための前提としての互助のお陰で、争いが路上生活者同士の安定性をもたらす。なぜなら、争いが起こることはお互いの不信や不満を知る、そして時にはそれを取り除くための最も有効な行為である。そうしたお互いの不信や不満のぶつかり合いを経てお互いの主張を知ることで、より安定的な関係が築かれる。この時、互助行為は争いの行き過ぎや、争いによって路上生活が困難になる人々が出てくるのを防ぐ。以下ではこの点について詳しく検討する。

第 3 章第 2 節で述べたように、喧嘩や、妬み、また盗難は、実に些細なことが多いのだが、日常的に見られる。ご飯を分けてくれない、自分の服が盗まれた、有機溶剤が欲しくて年長者に詰め寄る、こうした不満や不平を人々は強く主張する。生活背景が異なる人々が集まっているため、自分の周囲にいる人々がどのような考えを持つのかが分かりにくい。しかしお互いが自分の主張を述べることで初めて、お互いが何を考えているのかが表明される。それが異なるときにおこるのが争いであり、それはお互いの意見の違いを初めて認識する機会となる。

以下で不満のぶつかり合いが密な関係性を作りだす例を示す。先にも述べたドラッグを

巡るSと周囲の先輩たちとの争いは、Sの主張と周囲の意見の相違が引き起こす争いであった。Sは粘り強くドラッグを使用することを訴えることでドラッグを得た。この言い合いの中で、お互いのは不満を主張する。即ち、先輩たちは、ドラッグを使用すると体に害が及び、中毒者になってしまうと周囲に多大な迷惑をかけてしまうことへの忠告が厳しくなされている。同時にSは、自分がドラッグを吸うことを強く希望していることを周囲の人々にぶつけることができた。この争いから、お互いがドラッグについてどのように考えているのか、自分の敵なのか、それとも見方なのか、などの様々な意見を知ることができたという点において、お互いが何を考えているのか、という基礎的な不信は軽減されている。さらに次回以降こうした機会があった場合、以前はドラッグを渡したのだから、次は我慢しなくてはいけないという理解がお互いになされるかもしれない。あるいは、前回はこうした言い回しをすることによってドラッグを得ることができたのだから、次も同様に要求しよう、といった理解がなされるかもしれない。こうして、次回もまた争いが起こったとしても、そこでのお互いの主張のぶつかり合いはより踏み込まれたものとなるし、それはお互いの事情をより分かった状態だからこそ行われる。このような、争いを通して自己の不平や不満を相手に理解させようとするプロセスの繰り返しが重要である。こうした争い事はドラッグを巡る争いのように、比較的継続的に行われると考えられるものから、その時に得られた食べ物を巡る争いのように、その場限りのものまである。その度に全員が満足のできる合意形成は難しい一方で、そこで皆が自分の主張を強く掲げることで、お互いの考えを知ることで、安定的な関係性を得る。

そしてこうした争いは、お互いの関係性が短期的であるからこそより強く行われる。それは第1節で述べたように路上生活の場は流動的であり、いつ別な人々が路上に入ってきたり、路上から出て行ったりする。そのためこうしたゼロサム的な関係性の中において、争いは比較的激しい。

この時、第3章第2節で述べたAに関する記述が、例外である。すなわち短期的な間柄でないために、言いたいことを言いにくい関係性がある。Aをめぐる路上生活者の不満は多々あるにも拘らず、そのほとんどが彼に向けて直接主張されないことは先に述べた。傲慢な態度から、行政や警察との交渉、警察への「勝手な」通報に至るまで、路上生活者の不平不満は表立って彼に向けて発せられることは少ない。これは先にも述べたとおり、彼の先輩としての力やノウハウがあったり、彼自身が多くの貢献をしていたりしたことによるとも指摘できる。さらに、彼は決して流動的な人間ではない点も重要である。確かにローマ法王がカメルーンを訪れた際に刑務所に4カ月間ほどいたが、長期的にみると、彼は路上で生活を始めてから20年が経っている。その間彼はずっとヤウンデ市の路上での生活を続けており、したがっておそらくこれからも彼はここに居続けるのである。こうした、流動性が低い人物へ「言いたいことを言う」ことは、今後の路上での生活を鑑みると困難であろう。彼らのAへの主張は、明らかに本人が不利益を被った時(例えば自分が自転車を取ったことで通報される)に限られる。つまり路上生活者同士の関係性が短期的であること

を彼らが認識している場合、争いを通した自身の利益の確保や日常生活上の互助行為は、自分が利益を獲得して、相手が利益を失うというゼロサム的な、すなわちどちらかが利益を得て、どちらかが利益を得ないという関係性になりやすい。逆に A との関係性に見られるように、A との争いが必ずしもゼロサム的な関係とはならないこともある。なぜなら A と争うことによって被る不利益の方が、A と争わないで被る不利益よりももしかしたら大きいことが考えられるためである。従って彼との関係性を悪化させないことの方が、路上生活者にとってはポジティブサム的な関係性となりやすいと考えられるのである。

4.2.2 変わらない日常生活

「言いたいことを言う」ことは、多様な背景を持つ人々が集う、流動的な路上の中であれば行いやすいのだが、一方でただ言いたいことを主張し放題な状態では、彼らの生活は成り立たず、いわばやりたい放題となってしまう。さらに彼らが抱える日常生活上の困難は多岐にわたり、それらにも対処しなければならない。そこで無秩序な状態を避け、困難と対峙するための方法が、互助である。互助は都市居住民の多く、特にエスニックグループや親族同士の間で活発になされており、生活の基盤と言ってもよい。そうした互助を路上生活者の間で行うことで、ある程度の秩序と日々の生活の困難を回避する術としているのである。即ち路上の流動的が故に「ゆるやかな」地縁を紐帯として互助を活性化させていることが、路上生活に安定をもたらすものとなったのである。こうした互助が日常生活の中に埋め込まれているのは第 3 章で論じたとおりである。衣食住、仕事、健康管理に至るまで彼らはともに助け合いながら、生活上の様々な困難と対峙している。

そしてこうした互助は先に述べた争いとは決して矛盾するものでも、相反するものでもない。互助が埋め込まれた日常生活の中でも、自分の利益を優先したい、あるいは利益配分が不平等だと感じたらそれを主張したいと感じることは当然ある。得られる現金、食事、遊び道具、衣服などはすべて限りがあり、それを互助行為に基づく平等な分配にかけることは不可能に近い。争いも当然起こる。それは自己の主張を貯めこむのでも、何らかの秩序によりそれを統制されるのでもなく、遠慮なくぶつけあうことができるものである。個別的な路上生活者同士の互助があえば、こうしたぶつけあいが行き過ぎる前に、突出した利益の分配や、困難への対応不能な状況を防ぐのである。こうした互助と争いの相互補完的な関係性により、ヤウンデ市の路上生活者の生活は「なんとかやっていける」ものとなっている。

第5章 結論

5.1 結論

最後に本研究が明らかにしたことを整理する。本研究の目的は、流動的で多様な生活背景を持つ人々が集う都市にあって、人々が困難とどのように対峙しているのか、そしてどのような生活実践により困難を乗り越えようとするのかを、住民主導の互助行為に着目して明らかにすることであった。そのため第2章では、事例としてのカメルーン・ヤウンデ市の路上生活者について、都市の路上で暮らす人々の中でどのような位置にいるか、また彼らはなぜ路上生活者となったのか検討を行った。第3章では路上生活者の日常生活の多くの場面、とりわけどのような困難に直面しているか述べた上で、そこでの小規模ながらも様々な互助行為が見られることを明らかにした。同時にそこでは様々な争いが頻発していることを述べた。第4章では互助と争いを通した生活実践とはどのようなものかを検討するために、互助と争いが決して矛盾するのではなく、都市における人々の流動性と多様性といった社会的基盤の違いを克服して実践される点に言及した。以下では最後に指摘した互助と争いの生活実践についてさらに詳しく検討する。

路上生活者の生活世界において、人々の出入りが極めて激しいことは先に述べた。路上から刑務所へ投獄され、そしてまた路上へ戻ってくる人々、他の都市や地域へ自分の技術を生かすために、より高い稼ぎを得るために、あるいは親戚を求めて移動する人々、行政や市民社会組織からの支援により施設に入ったり出身の村に帰されたりする人々[25]、複数名がお金を出し合って路上生活をやめ、家を借りて生活を始める人々、警察や憲兵からの小規模自営業に対する取り締まりによって失業し、そのまま路上での生活を余儀なくされる人々。路上では日々様々な人々が出入りしている。そうした中にあって路上には互助と争いに基づくゼロサム的な世界が広がる。「他者」との利益の共有を図ることや自分自身の妥協は、自分が損をするだけになるかもしれない。従って、妥協や他者へ譲るといったことよりも、「言いたいことを言う」ことが最も合理的と考えられている。そこで行われている争いは短期的であるからこそ「他者」への不満を主張し合い、お互いを早く理解するのに役立つ。こうしたお互いの理解のための争いが、結果として路上生活の場の安定につな

[25] 現在は一時的に使用されていないが、ヤウンデ市エトゥクベ(Etoung-Ébé)地区には行政によるストリートチルドレンが一時的に住むことのできる施設がある。行政がストリートチルドレンを出身地に帰すプロジェクトを行った際、多くの子供たちがこの施設で一時的に暮らし、その後自分たちの出身地へ帰されることがあった。またカトリックの支援の一つで、先に紹介したエディマ社会センターのほかに、15名のストリートチルドレンが暮らすことのできる宿泊施設がある。ここでは衣食住の提供や教育に至るまで様々な支援がなされる。ここも原則としては行政の施設と同様、出身地に帰るまでの一時的に暮らす場所とされている。しかし実際には親族と連絡が取れなかったり、引き取りを拒否されたりするなどで何年も施設で暮らし続ける子供は多い。

がる。一方で争いにより路上生活が難しくなることを防ぎ、直面する様々な困難やリスクを緩和するための様々な互助行為が行われる。警察や憲兵の取り締まりのリスクに対して、あるいはドラッグの乱用が持つリスクに対して、事前に彼らの中で準備がなされ、リスクを最小限にとどめようとする動きは注目に値する。衣食住や健康管理、そして現金獲得のための創意工夫は互助行為として、決して規模が大きいものではないが、日常生活の中でほとんど無意識的になされており、彼らの生活の基盤として重要な役割を果たす。こうした互助行為が、共通の基盤を持ち合わせない人々の間でも生まれ得るというのは重要な視点であると考えられる。それは従来の多くの研究が指摘したような血縁を基盤としたものではなく、「他者」同士による互助行為であり、流動的であるがために極めて「ゆるやかな」地縁を基盤としている。

さらに、こうした互助行為や争いはもちろん「孤独」であるとか「ばらばら」であるということへの不安も大きく関係している。血縁をはじめとする人との何らかの関係性が極めて脆弱になっているのは路上生活者の特徴の一つといえるが、そうした中にあって当然生まれてくる不安や、特に小さい子供たちの年上に依存する態度がある。こうした心理的に甘えたい、より人との関係性の中で暮らしたいといった気持ちもまた、互助行為や争いをより活性化させるために働いていると考えられる。

以上検討してきたように、路上生活者の生活実践とは、様々な生活上の困難とリスクとの対峙を乗り越えるための互助行為といった一面的な見方では説明されない。そうではなく、路上生活世界は、流動的で多様な人々が暮らすことを背景としている。様々な互助行為を行いながら、争いを通した自己主張を繰り返す。それが路上にある程度の秩序と継続性をもたらすものとなっている。

5.2 今後の展望

最後に本研究の展望、今後の課題について、筆者が検討している考えを二点示す。

一点目は、他の都市との比較である。比較の仕方はいくつかあって、一つが同じカメルーンの都市ドゥアラ市との比較である。経済首都とも呼ばれるドゥアラ市では、ヤウンデ市と同様に路上生活者が多数存在する。本稿の中でも述べたように、路上生活者の都市間移動は頻繁に行われている。そうした人々のダイナミックな移動を検討する上で、ヤウンデ市とドゥアラ市に焦点を当ててその移動をたどることは、多くのストリートチルドレンや路上生活者に関しての研究が一都市のみに集中して行われてきた中で、新たな視点を見出す可能性を持つと言える。ドゥアラ市とヤウンデ市の間には道路も整備され、鉄道もあるなど、移動に大きな困難はない。こうした観点から　実際のフィールド調査も大きな障害なく行うことができる。

他の都市との比較としては、全く異なる国や地域との比較による検討も意義があると考

えられる。とりわけカメルーンにおけるストリートチルドレンや路上生活者は、急速な都市化と貧困の問題を抱えるフィリピンのマニラ首都圏やメキシコ・シティと比較すると、その人数が格段に少ない。この比較から、なぜヤウンデ市はストリートチルドレンないし路上生活者が少ないのかを検討することで、例えばヤウンデ市にある人々の自助努力のあり方がより顕著に見出されるかもしれない。つまり行政がほとんど何も手をつけなくても、そこで暮らす人々が独自に強固に連帯し、自分たちでその問題を乗り越える力を身につけていることが、他の都市との比較で浮き彫りになるかもしれないのである。

なお誤解を避けるために述べるが、こうした他の都市との比較は、ヤウンデ市における調査が十分なされているからではない。本稿の執筆に当たり筆者の調査期間が極めて短期であることは、自他ともに認めるところである。そのためヤウンデ市での継続的、長期的調査もまた必要とされることは言うまでもない。

二点目だが、路上生活を送る人々が流動的であると述べたが、この点はより具体的に検討する必要がある。A が 20 年路上生活を送っていると述べたが、A のように路上にずっととどまり続けている人々は他にも存在する。もしくは家があっても路上生活者の生活に継続的に参加する人々もいる。本稿ではこうした路上生活者の人々が、どれほど長く路上に留まり、路上との継続的な関係性を保っているのか、さらにそれにより彼らの関係性にどのような影響が及んでいるかの検討を多く行うことができなかった。このことについての検討は今後さらなるフィールドワークを通じて行う課題としたい。

参考文献

仏文・英文

Franqueville, André, 1984, *Yaoundé: construire une capitale,* Paris: ORSTOM.

Geschiere, Peter, 1997, *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa,* Charlottesville: University Press of Virginia.

Institute National de la Statistique, 2007, *Annuaire Statistique du Cameroun 2006,* Yaoundé: Institute National de la Statistique.

L'institut de Recherche et des Etudes de Comportements, 2000, *Enquete Sociologique sur les Enfants de la Rue,* Le Services de Coopération et D'Action Culturelle.

Maldonado, Carlos avec la collaboration de Josiane Capt et d'Erick Demol, 1987, *Petits producteurs urbains d'Afrique francophone: Analyse et politiques d'appui,* Genève: Bureau de international du tracvail.

Ministère des Affaires Sociales, 2008, *Enfants de la rue,* Yaoundé: Ministère des Affaires Sociales. (未刊行).

Ministry of Economy, Planning and Regional Development, National Institute of Statistics and United Nations Children's Fund, *Multiple Indicator Cluster Survey 2006,* United Nations Children's Fund.

Southall, Aidan, 1961, "Introductory Summary," Aidan Southall ed., *Social Change in Modern Africa,* London: Oxford University Press, 1-66.

邦文

赤坂賢, 2004,「原初の都市トンブクトゥ」関根康正編『<都市的なるもの>の現在——文化人類学的考察』東京大学出版会.

北澤毅・古賀正義編, 2008,『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社.

セン, アマルティア, 2000 訳,『自由と経済開発』日本経済新聞社.

西真如, 2009,『現代アフリカの公共性——エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』昭和堂.

野元美佐, 2001,「第 10 章 アフリカ都市のインフォーマル・セクター——カメルーン・首都ヤウンデの事例から」『アフリカの都市的世界』世界思想社, 265-83.

————, 2005,『アフリカ都市の民族誌——カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷過』明石書店.

日野舜也 1987,「北カメルーンのフルベ都市ガウンデレにおける部族関係と生業分化——フルベ都市民族誌 I」『アフリカ民族学的研究』同朋舎出版, 405-40.

————, 1992,「第 8 章 アフリカの伝統的社会と近代化」日野俊也編『アフリカの 21 世紀(2)アフリカの文化と社会』勁草書房, 221-54.

ヘーゲル, 1994 訳,『歴史哲学講義(上)』岩波書店.

松田素二, 1996,『都市を飼いならす——アフリカの都市人類学』河合出書房新社.

————, 1999,『抵抗する都市——ナイロビ移民の世界から』岩波書店.

————, 2009,『日常人類学宣言！——生活世界の深層へ／から』世界思想社.

峯陽一, 1999,『現代アフリカと開発経済学——市場経済の荒波の中で』日本評論社.

宮本正興・松田素二編, 1997,『新書アフリカ史』講談社現代新書.

和崎春日, 2001,「第 1 章　国民社会のなかのアフリカ伝統都市」嶋田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市的世界』世界思想社, 32-55.

渡辺大輔, 2007,「退職後の日常と当事者のニーズ——藤沢市竹炭くらぶを事例として」『KEIO SFC JOURNAL』7(1):42-55.

インターネットから得た情報

African Commission on Human and People's Rights, 2010, "Second periodic report on Cameroon within the framework of the African chapter on human and people's rights"(http://www.achpr.org/, 2010.1.17).

International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies, 2009, "Emergency appeal: Central Africa: Chad and Cameroon flood "(http://www.ifrc.org/, 2010.1.17).

財団法人　麻薬・覚せい剤乱用防止センター, 2009,「薬物乱用防止「ダメ。ゼッタイ。」ホームページ」(http://www.dapc.or.jp/, 2010.1.17).

United Nations Population Division, 2008, "World Urbanization Prospects: The 2007 Revision Population Database"
(http://esa.un.org/unup/index.asp?panel=1, 2010.1.17).

謝辞

最後にお世話になった方々へ一言。僕は過去を振り返ることができない人ので、実はこういうのはとても苦手なのですが、思い切って書いてみます。お世話になった人は数知れず。
梅垣先生、「カメルーンに4カ月行ってきました」と言い出す困った4年生だった僕に、多大なご指導を頂き、本当にありがとうございました。先生から少しでも多くのことを学びたいと思い、研究会は常に戦いの場でした。この戦いの日々は一生忘れません。
研究室の皆様、色々ご迷惑をおかけしました。1年間お付き合いいただき本当にありがとうございます。さとし先輩には夏の院入試対策以降、多大なご指導をいただき、ご飯にもお供させていただきました。だいすけ先輩、上原先輩、よしまり先輩には本論文執筆にあたりたくさんのコメントを頂き、「これで良いのか」、と激しくぐらつく僕の気持に自信を与えてくださいました。同期の芹澤君、竹岡さん、東浦君は、研究の話はもちろん、気分により激しく変化する僕の乱暴な言動に適宜付き合いあしらっていただいたことで、精神的に大きな支えとなりました。衣笠さん、中川原さん、廣原さんは特に日本語の校正をして頂き、少しでも読みやすい論文を作ることができました。
山本先生、いま僕が研究にどっぷり使っているもの先生のお陰です。先生の授業、そして研究会は本当に刺激的で多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。
笠井さん、いやもはや笠井先生とお呼びすべきでしょうか。初めて書いた研究計画書から、最後の最後の卒業論文まで、本当に多くのアドバイスをしていただきました。3年間こんなにもわがままな常識知らずの後輩にビシビシご指導していただき、そして時にはご飯に誘っていただき、本当にありがとうございました。
樋口君、人生も現場も現実も、理論通りにはいきませんね。それでも理論は重要であるようです。そんな世の儚さを、今後も語り合いましょう。卒論では特に分析部分について、樋口君のコメントを踏まえより先鋭化することができたと思います。最後にあなたの前で研究発表できたのは嬉しかったですよ。ありがとう。
佐々木先生、右も左も知らず、ただ「カメルーンへ行きたい！」と言い出す、今考えれば本当に無茶苦茶なことを言っていた僕に、懇切丁寧にフィールドや研究に様々なアドバイスをしていただきました。本当にありがとうございました。
日本にいるFrank、そしてカメルーンのHortense、Gerard。ヤウンデ市を第二の(第一の？)故郷と言えるのはみんなの協力があったからこそ。本当にありがとう。Ayamba、ビザを延長したとき、行政から資料を得たとき、あなたの助けがなければ大変なことになっていました。ありがとう。
そして、路上の皆よ、俺は、あと少し生きてみるから、だからお前らも生きてくれ。何かつかめるかもしれない。Merci Beaucoup, À bientôt!

2010年2月3日　研究室にて

玉井隆

路上生活者の生活実践
－カメルーン・ヤウンデ市を事例として－

2010年3月10日　　初版発行

著者　玉井隆

監修　梅垣理郎

発行　慶應義塾大学 湘南藤沢学会
〒252-0816　神奈川県藤沢市遠藤5322
TEL:0466-49-3437

Printed in Japan　　印刷・製本　　ワキプリントピア

SFC-SWP 2009-A-005

■本論文は研究会において優秀と認められ、出版されたものです。